

平成30年度

看護学教育ワークショップ報告書

自大学の強みや使命を活かすCQI

—自大学をとらえなおす・CQIへのエネルギーを得る

主催 文部科学大臣認定看護学教育研究共同利用拠点

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

期間 平成30年10月29日(月)～10月30日(火)

会場 千葉大学けやき会館 (千葉市稲毛区弥生町1-33)



目 次

1. 千葉大学挨拶	1
千葉大学大学院看護学研究科長 中村 伸枝	
2. 開催趣旨	2
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長 吉本 照子	
3. 平成30年度看護学教育ワークショップ 実施要領	3
4. 平成30年度看護学教育ワークショップ 日程表	5
5. 参加者概要	6
《講演と報告の部》	
6. 【報告】「CQ Iモデル開発の経緯とCQ IモデルVer.1の紹介」	8
報告者 和住 淑子 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 教授	
7. 【講演】「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」	13
講師 杉田由加里 文部科学省高等教育局 医学教育課 看護教育専門官	
8. 【報告】「外部指針をCQ Iにどのように使うか」	33
報告者 黒田久美子 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 准教授	
9. 【報告】「CQ I取り組み事例の紹介とCQ Iモデルの事例への適用」	38
報告者 中村 京子 熊本保健科学大学保健科学部看護学科 教授 荒尾 博美 熊本保健科学大学保健科学部看護学科 准教授 司 会 和住 淑子 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 教授	
《グループワークの部》	
10. 全日程参加者グループ別名簿	52
11. 看護学教育CQ IモデルVer.1を用いたワークの進め方・モデル図	55
12. ワークシート (A~D)	58
《総括》	
13. 全体討議・まとめ	62
14. ワークショップ評価	66
15. おわりに 総括とCQ I事業への展望	77
千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長 吉本 照子	
16. 実施体制	79

1. 千葉大学挨拶

千葉大学大学院看護学研究科長

中村 伸枝

おはようございます。千葉大学大学院看護学研究科長の中村です。

本日は、ご多用のところ、本研究科附属看護実践研究指導センター主催の看護学教育ワークショップにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。本年度も全国から多くの皆様にご参集いただき、本日、開催できますことを大変うれしく思っております。

本センターは、国内の看護学教育分野で唯一の文部科学大臣認定教育関係共同利用拠点として、それぞれの看護系大学では解決しがたい課題の解決や取り組みの共有により、効果的・効率的な教育改善を推進することを使命として活動しており、地域の多様な保健医療福祉機関の協力と参画により、各種事業を展開しています。このワークショップも事業の一環として、日本看護系大学協議会とも協力しながら実施するものです。

昨年度のワークショップでは、看護系大学の教員が、教育評価をはじめとした、目のやらなければいけないことに追われている中でも、CQI に意欲的に取り組むエネルギーを生み出し、維持し、高める必要性を共有しました。また、本センターが拠点として行った調査研究や各種事業を通して、他大学との意見交換等の外部支援が、自大学を新たに捉え直し、CQI への取り組みのエネルギーを生み出すことがわかりました。

そこで、今年度は各大学が自大学の状況をより客観的にとらえ、特徴を大切にしながら、課題を解決できるように、テーマを「**自大学の強みや使命を活かす CQI－自大学をとらえなおす・CQI へのエネルギーを得る**」としました。多くの看護系大学のご協力のもとに、当センターで開発した CQI モデルをご紹介します。グループワークの中で活用しながら、参加者が自大学をとらえなおし、CQI へのエネルギーを得る機会になることを目指しています。そして、各大学の多様な教育・研究あるいは地域貢献活動について、皆様で看護学分野の強みを確認しながら、CQI を推進する上で必要なことを相互に学び合い、参加者が教員としての力量をさらに高め、各大学の教育の質改善を支援しあう機会にしたいと思います。

本日は来賓といたしまして、文部科学省高等教育局大学振興課の多田専門官にお越しいただきました。また、文部科学省高等教育局医学教育課の杉田看護教育専門官から、「看護学教育モデルコア・カリキュラムの活用」と題した講演を、昨年の本センターの FD 企画者研修にご参加いただいた、熊本保健科学大学保健科学部看護学科の中村教授、荒尾准教授から CQI 取り組み事例の報告をいただく予定となっております。

最後になりますが、ご参集いただきました皆様の総力によりまして、実りある成果を出していただけるよう期待しております。2日間どうぞよろしく申し上げます。

2. 平成30年度看護学教育ワークショップ開催趣旨

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長

吉本 照子

現在、看護系大学をはじめ日本の大学は、18歳人口が減少し、1人ひとりの活躍がより重要になる中で、「大学教育全体としてより多様で高度な教育を展開していく」¹⁾ ために、「自らの強みを持つ分野へ取組を集中・強化するとともに、他大学との連携を進める」¹⁾ ことが期待されている。

看護系大学について、「大学教育全体としてより多様で高度な教育を展開していく」ための教育環境をみると、看護系大学の急増に伴って、実習施設の確保が困難となり、在宅医療を基本とする医療・介護体制の構築に向けて医療・介護施設の機能分化が進み、地域における今後の人材配置を想定した人材育成が期待されている。また教員の流動性の高まりにより、率直な意見交換にもとづく理念の共有と具現化のための教育活動の継続、および多様な学生を看護職として育成するための個別の合理的配慮に関する考え方の共有等が、より重要になっている。各教員および教育組織は、こうした教育環境のもとで生じた課題を解決しながら、より効果的・効率的に看護の価値を創出するために、自らの前提や思考過程を問い直し、学生や住民の多様な能力の発揮を支援する必要がある。

当センターは、全国の看護系大学が、こうした教育環境および社会的期待に対し、より効果的・効率的に応えるように、看護学教育の拠点として、「看護学教育のCQI (Continuous Quality Improvement: 継続的質改善) モデル開発と活用推進」をはじめとする各事業に取り組んでいる。

CQI モデルは、各々の教員、あるいは各大学の委員会等の教育組織が、日々の教育活動における課題解決、あるいは中長期的な目標の達成に向けて、効果的に状況を捉えなおし、学生、関係機関等との連携や地域における役割遂行を計画し、CQI に自律的に取り組めばよいか、というてがかりを提供するために開発している。教員や教育組織が自律的にCQIに取り組むためのエネルギーあるいはやりがいを得るための要素や活用性を高めるためのツールとして、記録用紙を組み込んだ点が特徴の一つである。

平成30年度看護学教育ワークショップでは、「講演と報告の部」において、看護学教育行政の動向と看護系大学への社会からの役割期待を共有し、CQI モデル Ver. 1 を紹介した。さらに、自大学の状況を捉えなおし、取り組みを開始した大学の事例を紹介していただき、教育資源の一つとしてのCQIモデルの理解の促進と周知をめざした。また、関連法令をはじめ「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」等の外部指針を、主体的に活用してCQIを推進するための考え方と方法を、全国調査および事例研究をもとに提言した。

「個人・グループワークの部」においては、CQIモデルを活用するための記録用紙を使用し、4段階の個人・グループワークを行った。自大学の現状に対する理解を深め、現状に至るプロセスと文脈をとらえて他大学に説明し、相互に助言等の支援を行いながら、自大学のありたい姿とそのための方略を導くように、CQIモデルの活用推進をめざした。あわせて、こうした相互支援により、多様な設置主体や所在地域の看護系大学との連携を進める必要性和有効性を実感できるように企画した。

1) 教育関係共同利用拠点制度について. 文部科学省ホームページ, 2019年1月3日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/attach/1287149.htm

3. 平成30年度看護学教育ワークショップ 実施要項

1. テーマ 自大学の強みや使命を活かすCQI

—自大学をとらえなおす・CQI へのエネルギーを得る

2. 主 旨

少子高齢社会を見据えた大学改革が推進されるなか、看護系大学は増加を続けている。また、地域包括ケアシステムの構築に向けて医療介護福祉の分野は激変しており、医療の分野においても新たに必要な教育内容が増えている。看護系大学の教育環境および学士課程卒業者に対する社会的要請の急激な変化に直面している現在、看護系大学における教育の質保証の必要性が増している。

このような現状に鑑み、昨年度の看護学教育ワークショップでは、CQI (Continuous Quality Improvement: 看護学教育の継続的質改善) をテーマに取り上げたが、多くの参加者が、目前のやらなければいけないことに追われ疲弊しており、CQI に意欲的に取り組むエネルギーが枯渇している状況を訴えていた。

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センターは、看護学教育共同利用拠点として、多くの看護系大学との協働のもと、CQI モデルの開発に取り組んでいる。そこで、本年度の看護学教育ワークショップは、開発中の CQI モデルを使ったワークを通して、参加者が、自大学をとらえなおし、CQI へのエネルギーを得る機会になることを目指して企画した。またCQI を推進する上で必要なことを参加者の方々の声を通して考える機会としたい。

3. 目 的

参加者が、開発中の CQI モデルを使ったワークを通して、自大学をとらえなおし、CQI へのエネルギーを得る。

4. プログラム概要

- ・報告「CQI モデル開発の経緯とCQIモデルVer. 1の紹介」, 「外部指針をCQI にどのように使うか」, 「CQI 取組事例の紹介とCQI モデル事例への適用」
- ・講演「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」(文部科学省看護教育専門官) 、グループワーク、交流会、全体ディスカッション

5. 主 催

看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

6. 実施方法

- (1) 期 間 平成30年10月29日(月)～10月30日(火) 2日間
- (2) 会 場 千葉大学けやき会館(千葉市稲毛区弥生町1-33)
(西千葉キャンパスで、看護学部がある亥鼻キャンパスとは異なります)
- (3) 日 程 別紙のとおり
- (4) 定 員 【講演と報告の部】 150名
【全日程】 60名
- (5) 参加要件 【講演と報告の部】 どなたでも参加できます。
【全日程】 看護系大学において、組織的な教育の質改善(QI)を推進する教員。
原則として、准教授以上とし、以下の①～②を充たすことといたします。
- ① 日程に参加できる。
(参加者全体への影響がありますので、途中参加・退席は認められません)
- ② 自大学に関する情報を収集し、資料を当日に持参できる。

- (6) 参加申込 **【講演と報告の部】** センターホームページ(<https://www.n.chiba-u.jp/center/>)にある看護学教育ワークショップ申し込みフォームより、お申し込みください。
* 申込み〆切：**9月28日(月) 17時**
【全日程】 看護師等養成課程を置く学部等の長の推薦が必要です。
本センターホームページ(<https://www.n.chiba-u.jp/center/>)より所定の「参加申込書」をダウンロードし、看護学教育ワークショップ申し込みフォームにPDF添付の上、お申し込みください。
* 申込み〆切：**8月27日(月) 17時**
- (7) 参加者決定 **【講演と報告の部】** お申し込み確認後、必要事項(振込先等)をメールにてご連絡いたします。
【全日程】9月7日(金) までに、参加の可否をメールにて通知します。
定員を超える応募者があった場合は、参加申込書等を参考にして決定させていただきます。
※準備の都合上、当日参加は認められませんので、参加の可否を、事前にご確認願います。
- (8) 参加費 **【講演と報告の部】** 5,000円
【全日程】 20,000円
* 本ワークショップ参加のために要する経費(往復旅費、宿泊費、昼食代)は、派遣施設および参加者でご負担ください。
* 参加決定の連絡の際に、振り込み先をご案内します。
- (9) 昼食 全日程参加の方は、当日は混雑が予想されますので、各自お弁当をご持参願います。
- (10) 交流会 全日程参加の方は、初日の日程終了後に千葉大学けやき会館内レストランで交流会を開催いたします。
* 予約手配の関係上、参加申込書に出欠をご記入ください。
- (11) 宿泊施設 各自で手配をお願いいたします。
- (12) 修了証書 2日間の全日程に参加した方を、修了要件を満たしたと評価し、千葉大学大学院看護学研究科より修了証書を授与いたします。

7. 個人情報の取り扱い

看護学教育ワークショップへの申込みに際し提出された「参加申込書」等に記載の個人情報については、看護学教育ワークショップ業務及びセンター年報への名簿掲載のために利用し、それ以外の目的に利用することはありません。

8. お問い合わせ先

〒260-8672 千葉市中央区亥鼻1-8-1

千葉大学看護学部センター事業支援係(担当: 上村・齊藤)

TEL : 043-226-2464

FAX : 043-226-2382

メール : kango-cqi@chiba-u.jp

4. 看護学教育研究共同利用拠点 平成30年度看護学教育ワークショップ日程表
自大学の強みや使命を活かす CQI
—自大学をとらえなおす・CQI へのエネルギーを得る

《第1日目 10月29日(月)》

9:30 ~ 受付(千葉大学けやき会館)

10:00 ~ 10:10 開会の辞

来賓挨拶 文部科学省高等教育局大学振興課 専門官 多田典史 氏
オリエンテーション

【講演と報告の部】

10:10 ~ 10:50 報告「CQI モデル開発の経緯と CQI モデル Ver.1 の紹介」当センター 教授 和住淑子

10:50 ~ 11:30 講演「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」

文部科学省高等教育局医学教育課 看護教育専門官 杉田由加里 氏

11:30 ~ 11:40 報告「外部指針を CQI にどのように使うか」 当センター 准教授 黒田久美子

11:40 ~ 12:30 報告「CQI取り組み事例の紹介と CQIモデルの事例への適用」

熊本保健科学大学保健科学部看護学科 教授 中村京子 氏

熊本保健科学大学保健科学部看護学科 准教授 荒尾博美 氏

当センター 教授 和住淑子

《講演と報告の部のみ参加者》 終了・解散

12:30 ~ 13:30 【全日程】 昼食・休憩

【ワーク(全日程のみ)】

13:30 ~ 14:00 オリエンテーション・移動

14:00 ~ 14:30 ワークA

14:30 ~ 17:00 ワークB・ワークC

17:15 ~ 19:30 交流会(けやき会館1F・レストランコルザ)

《第2日目 10月30日(火)》

9:30 ~ 12:00 ワークB・ワークC 続き

12:00 ~ 13:00 昼食・休憩

13:00 ~ 14:30 ワークD

14:40 ~ 15:40 全体討議・まとめ

15:40 ~ 16:00 閉講式

- * ワーク A : 自大学・地域・社会全体の現状を俯瞰する(個人)
- B : 自大学のストーリーを語り、相互にフィードバックする(個人、グループワーク)
- C : 学生・教員・自大学・地域のありたい姿の実現に向け、第一歩を踏み出す(グループワーク)
- D : 自大学でCQIを推進する上で必要なこと・課題(グループワーク)

* 全体討議・まとめ

- ・「自大学のとらえなおし」、「CQIへのエネルギーを得る」に関する全体討議
- ・<ワークD>の共有をし、さらに解決に向けてのヒントを得る全体討議
- ・まとめ

5. 参加者概要

■全参加者（講演と報告の部のみ参加者含む） 89大学 101名

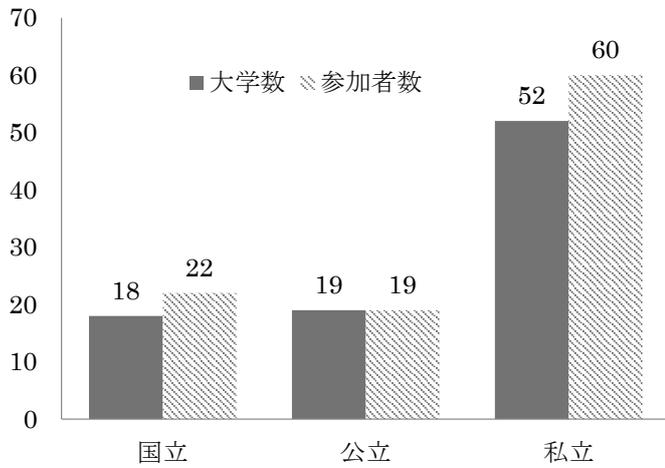


図1 国公立別参加大学数・参加者数

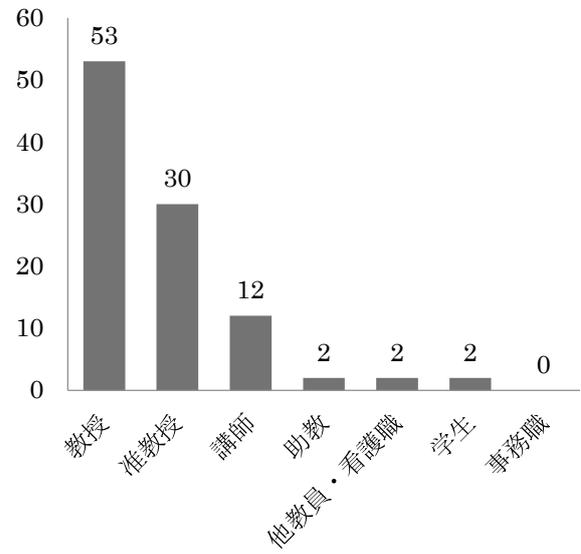


図2 職位別参加者数

■全日程参加者 56大学 57名

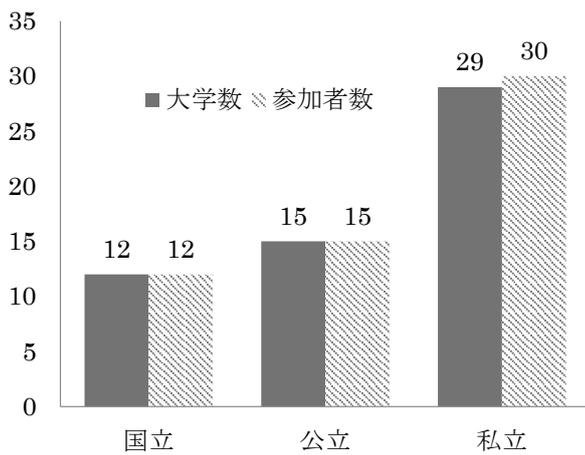


図3 国公立別参加大学数・参加者数

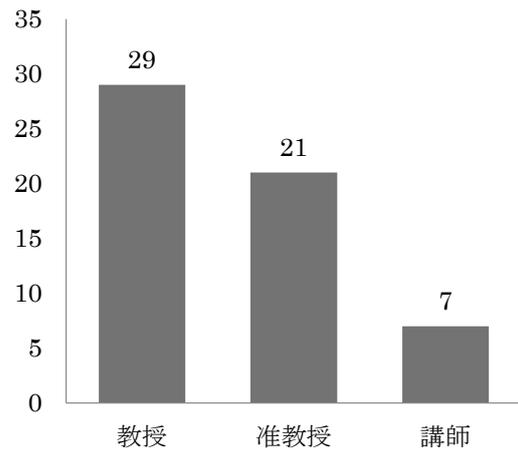


図4 職位別参加者数

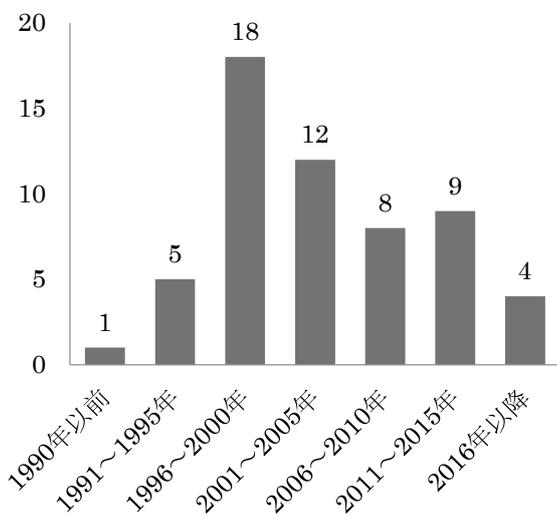


図5 開設年度別参加者数

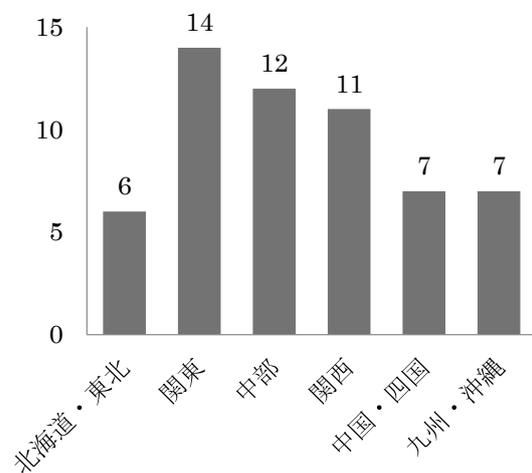


図6 全国ブロック別参加者数

自大学の強みや使命を活かす CQI

—自大学をとらえなおす・CQI へのエネルギーを得る

<講演と報告の部>

報告「CQIモデル開発の経緯とCQIモデルVer.1の紹介」

報告者：和住淑子

(千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 教授)

講演「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」

講師：杉田由加里

(文部科学省 高等教育局医学教育課 看護教育専門官)

報告「外部指針を CQI にどのように使うか」

報告者：黒田久美子

(千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 准教授)

報告「CQI 取組事例の紹介とCQIモデルの事例への適用」

報告者：中村京子

(熊本保健科学大学保健科学部看護学科 教授)

荒尾博美

(熊本保健科学大学保健科学部看護学科 准教授)

司会：和住淑子

(千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター 教授)

6. 報告「CQI モデル開発の経緯と CQI モデル Ver. 1 の紹介

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター
和住 淑子

当センターは、文部科学大臣認定看護学教育研究共同利用拠点事業として「看護学教育の継続的質改善（CQI）モデルの開発と活用推進」に取り組んでいる（パワーポイント2枚目参照）。この事業の目的は、国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を解決し、地域で人々の Life（生命・生活・人生）を支える自律的看護職を輩出するために、**看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement : CQI）モデル**を開発し、活用を推進することにより、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援することである。

本事業は、平成 28 年度より 4 年間の計画で進めており、本年度（平成 30 年度）は、その 3 年目に当たる（パワーポイント 3 枚目参照）。当センターでは、平成 28 年度から 29 年度にかけて、看護系大学教育の CQI 実態に関する全国調査や事例研究を行い、その結果を活用しながらモデル開発を行ってきた。モデル開発に当たり当センター教員間で確認したことは、以下である。

- モデルのユーザーは、自組織の教育改善にとり組む意思のある看護系大学教員であり、職位や立場は問わない
- 絵に描いた餅ではなく、現実的で実行可能な CQI 活動を導き出すことのできるモデルにする
- モデル活用のゴールは、活用した看護系大学教員の自組織の現状の見方が転換し、CQI の推進力を得ることである

いくつかの試案の段階を経て、本日、この看護学教育ワークショップにおいて、**CQI モデル Ver.1** を提示できる段階に至った。その間、専門家会議を開催し、さまざまな立場の看護系大学教員からご意見を伺った。

開発した **CQI モデル Ver.1** は、**図 1 「看護系大学教員としての自己の立ち位置を見極めるための構造図」**、**図 2 「看護学教育の継続的質改善に向かう思考の方向性をあらわす図」** の 2 つのモデル図から構成されている（パワーポイント 4、5 枚目参照）。

図 1 は、看護系大学の CQI を考えるにあたり、視野に入れるべき要素と要素間の関係性、関係性の広がり範囲を示しており、個々の看護系大学教員が自己の立ち位置を多面的に見極めることができるようになることを期待して作成した。図 1 の中央には、看護系大学の「教育・研究・社会貢献活動の展開」を配置し、その構成要素として、「看護の対象となる人々」と看護の提供者としての「学生」「教員」を配置した。「看護の対象となる人々」への看護の提供を通して「学生」と「教員」の教授学習過程は展開されるため、教育内容や方法の改善のためには、「看護の対象となる人々」からのフィードバックが欠かせない。

また、看護系大学の「教育・研究・社会貢献活動の展開」は、「自大学」内で完結するものではなく、「地域の保健医療福祉機関」と密接に連携しながら行われるものである。さらに、大学は、大学をとりまく「地域社会」とも密接な関係がある。「地域で暮らす人々」は、看護系大学を健康資源として活用したり、看護学生に学びの場を提供している。このようにして、学生は、やがて「地域社会」で「人々の Life（生命・生活・人生）を支える自律的看護職」となり、「地域で暮らす人々」の健康を支援する役割を担う。このような「地域社会」は、地域社会をとりまく「社会全体（含グローバル）」の影響を受けている。個々の看護系大学教員は、図1を視点として、自身が気になっていることを含む自大学の現状について振り返り、それをとりまく自大学・地域・社会全体は、どのようにつながりあっているのかを多面的に見極めることができる。

図2は、現状に至るプロセスの振り返りを促すことによって、より深い現状認識に至り、それを踏まえて自大学のありたい姿や必要な CQI について、それぞれの看護系大学教員が自身の立場から検討できるようになることを期待して作成した。図2の中央には、図1と同じ図が幾重にも重なって配置されている。これは、自大学の現状が、さまざまな過去の経緯の積み重ねによって、成り立っていることを示している。自身が気になっていることを含む自大学の現状を認識した看護系大学教員は、すぐにどうしたらよいのかと解決策を考えるのではなく、この現状が過去の如何なる経緯の積み重ねによって作りだされてきたのか、そのプロセスを振り返る。これを繰り返す中で、現状認識が深まり、学生・教員・大学・地域のありたい姿が見えてくるようになる。ありたい姿が見えてきたら、目指す状態に向かって、今、自分の立場からどのように一歩を踏み出すことができるか、具体的な行動を考えることができる。さらに、ありたい姿に向かって一歩を踏み出してみれば、それに伴って、さらに現状理解が深まり、ありたい姿がさらに鮮明に見えてくる。鮮明になった目標像に向かって、さらに自身がどのように行動するかを現実的に考え、実行に移せば、それに伴って、現状が変化してくる。図2は、このような思考過程を螺旋的に歩むことで、看護学教育の継続的質改善が実現されることを示している。

本ワークショップの全日程参加者には、この後、このモデルを活用して自大学をとらえなおすワークショップも計画している。今後のモデルの更なる精練のため、活用してみても感想や忌憚のないご意見をお寄せいただきたい。

CQIモデル開発の経緯と CQIモデルVer.1の紹介



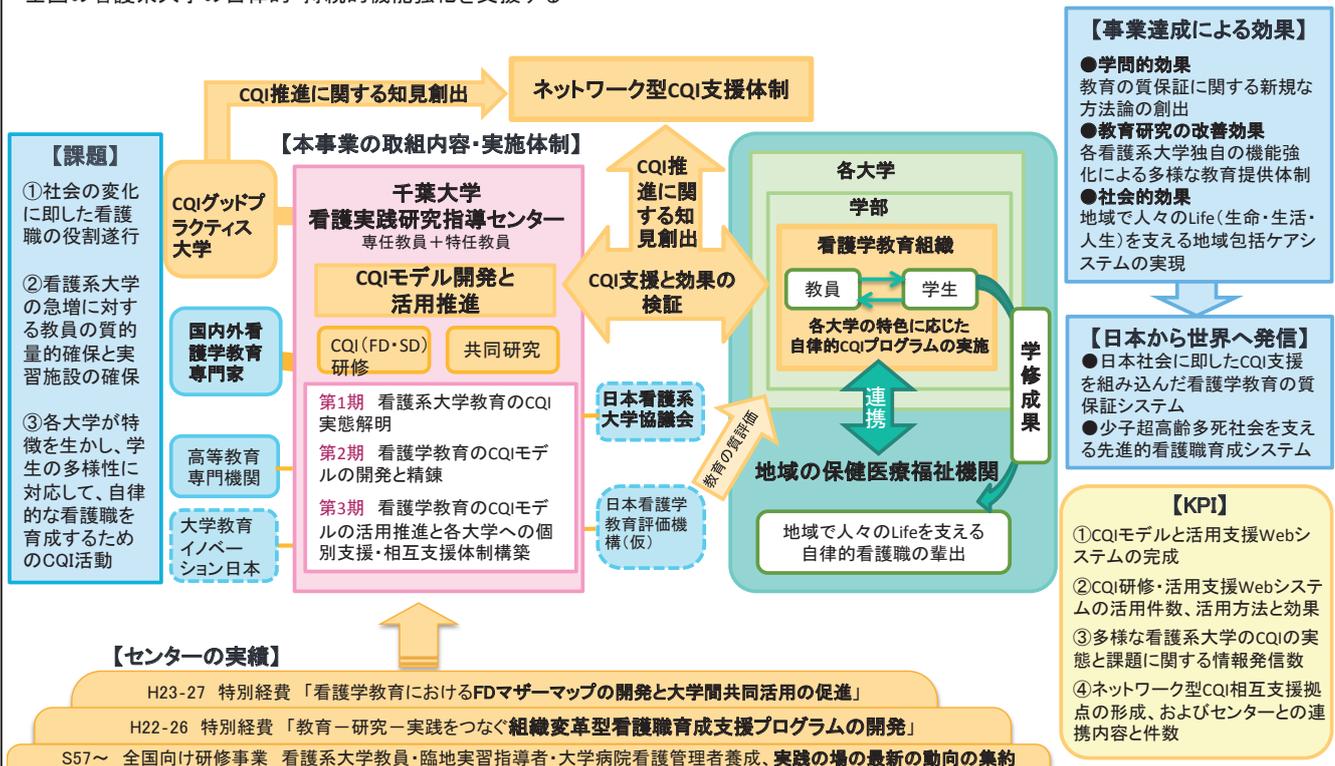
政策・教育開発研究部 和住 淑子



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

看護学教育の継続的質改善(CQI)モデルの開発と活用推進

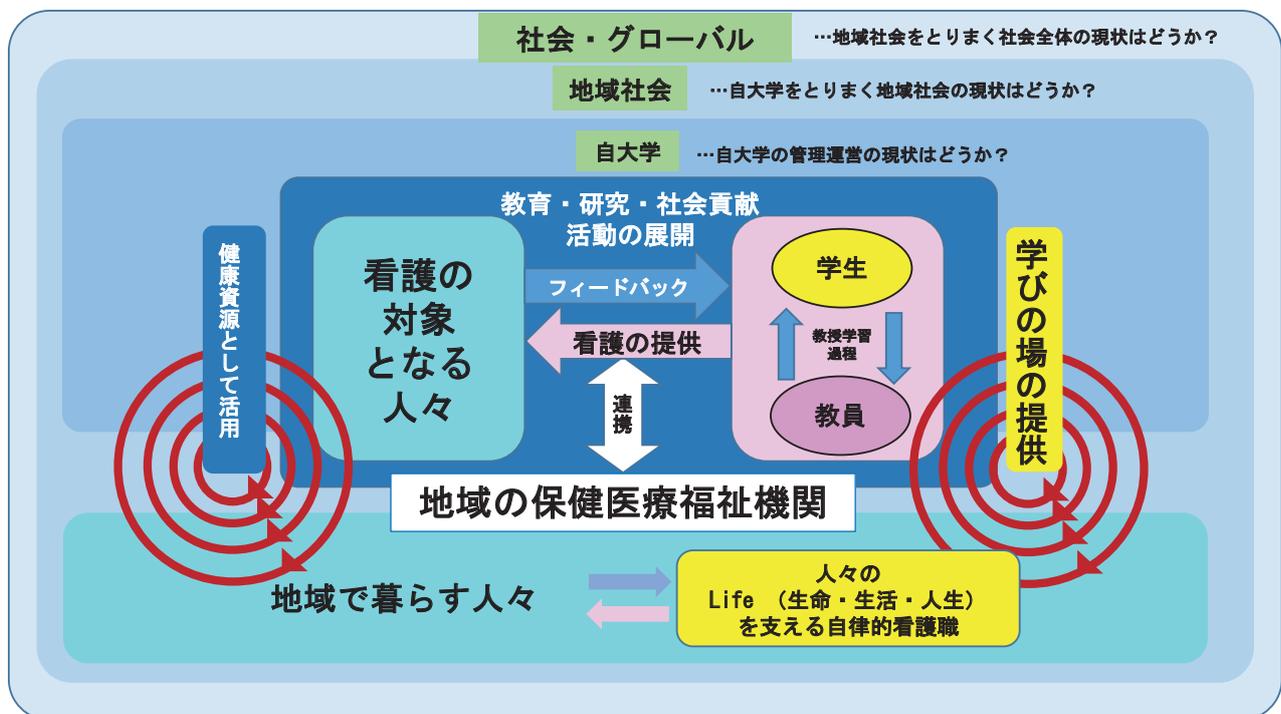
【事業目的】 国がめざす「効果的・効率的な医療提供体制の構築」の課題を解決し、地域で人々のLife(生命・生活・人生)を支える看護職を輩出するために、看護学教育の継続的質改善(Continuous Quality Improvement: CQI)モデルを開発し、活用を推進することにより、全国の看護系大学の自律的・持続的機能強化を支援する



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

看護学教育の継続的質改善(CQI)モデルの開発と活用推進 年次計画

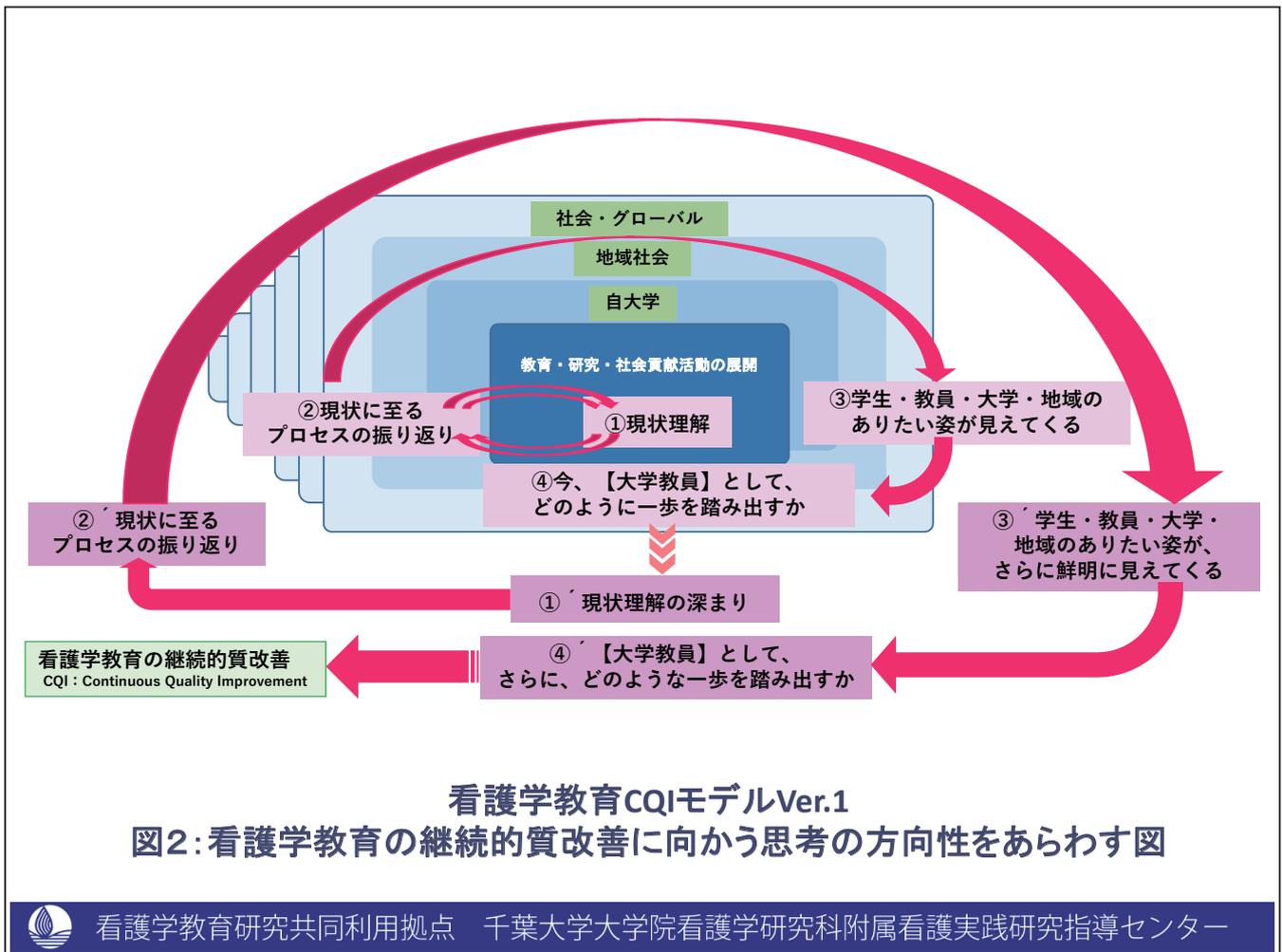
	平成28年度	平成29年度(実施中)	平成30年度	平成31年度
事業フェーズ	第1期:看護系大学教育のCQI実態解明	第2期:看護学教育CQIモデル開発	第3期:CQIモデルの活用推進	
CQIモデル開発	<ul style="list-style-type: none"> CQI全国調査(調査票作成) CQI事例研究準備 国内外機関ヒヤリング調査準備 	<ul style="list-style-type: none"> CQI全国調査(JANPU連携) CQI事例研究 国内外機関のヒヤリング調査 CQIモデル試案作成 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデルの活用説明会実施 活用協力校の募集、選定、ルールの決定と共有 CQIモデルの検証・精練・完成 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデル活用支援と効果の検証 CQI推進者研修プログラムの開発と実施 全国CQI調査の実施と分析
実施内容	各大学個別CQI支援(FDマザーマップ活用/FDコンサルテーション/CQIモデル活用推進)			
	<ul style="list-style-type: none"> 個別CQI支援 FDマザーマップ活用の効果検証 	<ul style="list-style-type: none"> 各大学要請対応型CQI支援 FDマザーマップ活用型FD支援 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデル活用型CQI支援 各大学要請対応型CQI支援 FDマザーマップ活用型FD支援 	<ul style="list-style-type: none"> CQIモデル活用型CQI支援 各大学要請対応型CQI支援 FDマザーマップ活用型FD支援
	<ul style="list-style-type: none"> CQI研修事業 CQIコンテンツ開発 	CQI支援研修の拡充、およびFD&SDコンテンツ開発		
	看護学教育ワークショップ(10月) <ul style="list-style-type: none"> 看護系大学のCQIに関する課題認識の共有 	看護学教育ワークショップ(10月) <ul style="list-style-type: none"> 看護系大学のCQIの実態共有と動機づけ支援 	看護学教育ワークショップ(10月) <ul style="list-style-type: none"> 看護系大学のCQI活動の効果を自覚できる支援 	看護学教育ワークショップ(10月) <ul style="list-style-type: none"> 看護学生の学修成果の向上と大学の機能強化に向けたCQIの支援
ネットワーク型CQI相互支援体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> JANPUとの連携準備への協議 研修事業のwebシステム開発 	<ul style="list-style-type: none"> JANPUとの連携会議 看護学教育評価機構(仮)・大学教育イノベーション日本との連携体制の検討 研修事業webシステムの試用とCQI支援webシステムへの改善 	<ul style="list-style-type: none"> JANPU・看護学教育評価機構(仮)・大学教育イノベーション日本との連携体制の検討 CQI支援webシステムの運用 ネットワーク型CQI相互支援体制構築準備 	<ul style="list-style-type: none"> CQI情報の集約と発信に関する左記機関との調整と連携 CQI支援webシステムの活用評価 ネットワーク型CQI拠点形成
事業評価と発信	<ul style="list-style-type: none"> 外部評価候補者の選定と打診 CQI研修広報 	<ul style="list-style-type: none"> 外部評価 CQI研修広報 CQI情報発信のHP改善 	<ul style="list-style-type: none"> 外部評価 CQI研修広報 CQI情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> 外部評価 CQI研修広報 CQI情報発信
各年度の事業評価指標	<ol style="list-style-type: none"> CQI調査票試案の完成 研修事業webシステム試行版完成 CQI情報集約・発信数 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 JANPUとの質保証に関する連携および調査協力に関する合意 	<ol style="list-style-type: none"> CQI調査回収率、結果報告書 CQIモデル試案の可視化 CQI情報の発信数 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 JANPUとの結果および課題の共有 	<ol style="list-style-type: none"> CQIモデル活用支援システム試行版の完成 CQIモデル活用協力校参加数 CQI情報の発信数 大学の特性に応じた研修事業の活用度の上昇 JANPU等との連携に関する合意 ネットワーク型CQI相互支援参加大学明示 	<ol style="list-style-type: none"> CQIモデル活用支援webシステムの完成 大学の特性に応じた研修事業の活用度(件数、内容と効果)の上昇 CQI情報の発信数 ネットワーク型CQI相互支援拠点の形成およびセンターとの連携内容と件数



看護学教育CQIモデルVer.1

図1:看護系大学教員としての自己の立ち位置を見極めるための構造図





7. 講演「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」

文部科学省 高等教育局医学教育課 看護教育専門官
杉田 由加里

平成30年度 看護学教育ワークショップ 看護学教育モデル・コア・カリキュラムの 策定と活用

●
平成30年10月29日(月)
文部科学省 高等教育局 医学教育課
看護教育専門官 杉田由加里

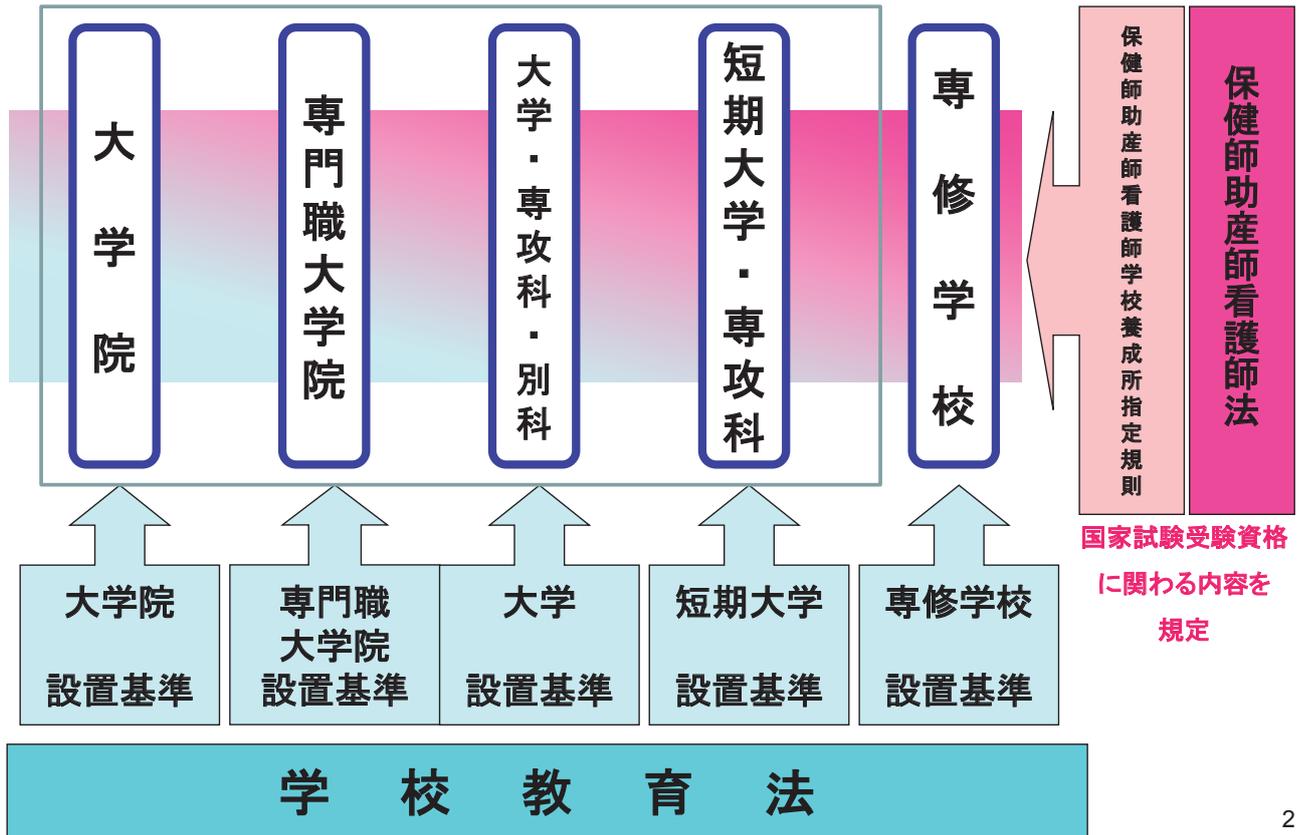


文部科学省

MEXT

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

高等教育機関の設置基準と保助看資格制度との関係



2

学校教育法等における教育課程ごとの目的

専修学校	職業若しくは实际生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ることを目的として次の各号に該当する組織的な教育を行うもの (学校教育法 第二百二十四条)
大学	大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。 (学校教育法 第八十三条)
専攻科	大学の専攻科は、大学を卒業した者又は文部科学大臣の定めるところにより、これと同等以上の学力があると認められた者に対して、精深な程度において、特別の事項を教授し、その研究を指導することを目的とし、その修業年限は、一年以上とする。 (学校教育法 第九十一条第二項)
別科	大学の別科は前条第一項に規定する入学資格を有する者に対して、簡易な程度において、特別の技能教育を施すことを目的とし、その修業年限は、一年以上とする。 (学校教育法 第九十一条第三項)
修士課程	修士課程は、広い視野に立って精深な学識を授け、専攻分野における研究能力又はこれに加えて高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力を培うことを目的とする。 (大学院設置基準 第三条)
専門職大学院	専門職学位課程は、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培うことを目的とする (専門職大学院設置基準 第二条)
専門職大学	前条の大学のうち、深く専門の学芸を教授研究し、専門性が求められる職業を担うための実践的かつ応用的な能力を展開させることを目的とする (学校教育法 第八十三条の二)

3

医学教育課が所管する医療系・福祉系人材

- (1)医師 (2)歯科医師 (3)薬剤師
(4)看護師 (5)保健師 (6)助産師
(7)診療放射線技師 (8)臨床検査技師
(9)理学療法士 (10)作業療法士
(11)視能訓練士 (12)言語聴覚士
(13)臨床工学技士 (14)義肢装具士 (15)救急救命士
(16)歯科衛生士 (17)歯科技工士
(18)あん摩マッサージ指圧師
(19)はり師 (20)きゅう師 (21)柔道整復師
(22)社会福祉士 (23)介護福祉士 (24)精神保健福祉士
計24資格者

4

看護師学校等の指定、変更承認申請及び変更届出

1. 指定申請
2. 変更承認申請
 - ①課程、修業年限及び入学定員の変更
 - ②教育課程の変更
 - ③校舎の各室の用途及び面積の変更
 - ④実習施設の変更

①、②：学生受入れの前年度の5月末、7月末、もしくは10月末までに申請
③、④：承認を受けようとする日から起算して3か月前まで

3. 指定取消し申請
4. 変更の届出(設置者、名称、位置など)
5. 報告(学生募集停止)

*** 申請・届出をする際は、必ず最新の「文部科学大臣が指定する看護師学校等の指定申請等提出書類の作成手引き」を参照**

(文部科学省ホームページに掲載)

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/03/07/1316576_01.pdf

* 文部科学大臣が指定又は認定している看護師学校等における実習施設の変更の申請について(通知)
(高等教育局長通知, 平成30年10月18日)

5

看護系大学の現状

今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ【概要】

平成30年6月28日 中央教育審議会大学分科会将来構想部会

2040年の社会の姿

- SDGs(持続可能な開発のための目標) → 全ての人が必要な教育を受け、その能力を最大限に発揮でき、平和と豊かさを楽しむことができる社会へ
- Society5.0・第4次産業革命 → 現時点では想像もつかない仕事に従事、幅広い知識をもとに、新しいアイデアや構想を生み出せる力が強みに
- 人生100年時代 → 生涯を通じて切れ目なく学び、すべての人が活躍し続けられる社会へ
- グローバル化 → 独自の社会の在り方や文化を踏まえた上で、多様性を受け入れる社会システムの構築へ
- 地方創生 → 知識集約型経済を活かした地方拠点の創出と、個人の価値観を尊重する生活環境を提供できる社会へ

2040年に向けた高等教育の課題と方向性

高等教育における「学び」の再構築

- ◇ 「何を学び、身に付けることができるのか」を中軸に据えた学修者本位の高等教育への転換
- ◇ 個々人の「強み」や卓越した才能を最大限伸ばす教育、文系・理系の区別にとらわれない、新しいリテラシーにも対応した教育、専門知や技能を組み合わせさせた教育の充実
- ◇ 「社会に開かれた教育課程」という理念の初等中等教育からの接続を意識した、高等教育における「学び」の再構築

高等教育の新たな役割

- ◇ リカレント教育を通じ、世代を越えた「知識の共通基盤」に
- ◇ 国内外に必要な教育を提供(日本の高等教育の国際展開)
- ◇ 地方創生、地域を支える人材の育成

高等教育に対する社会からの関与・理解と支援の在り方

- ◇ 高等教育機関自らが、その「強み」と「特色」を社会に発信
- ◇ 高等教育の質保証に関する国内外での認知向上
- ◇ 産業界の雇用の在り方、働き方改革と、高等教育が提供する学びのマッチング
- ◇ 教育投資効果を最大化する形での公的支援、人材面での社会への還元と社会からの支援の経理確保

18歳人口減への対応

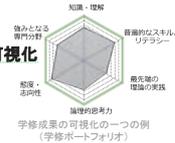
- ◇ できる限り多くの学生が学び、一旦社会に出た後も学びを継続するための魅力的な高等教育の提供
- ◇ 国公私全体で支える高等教育がより重要に(そのための国公私役割分担の再確認)

社会の変化に対応できる人材とその成長の場となる高等教育

- 「個々人の強みを最大限に活かすことを可能とする教育」への転換
 - ・学修者が「自らが学んで身に付けたこと」を説明できる体系的なカリキュラムの編成

教育の質の保証と情報公表

- 教学マネジメントの確立とその前提としての学修成果の可視化(教学マネジメント指針の策定、大学に対する学生の学修時間等の学修成果等の情報公表の義務付け、産業界等の採用プロセスにおける当該情報の積極的な活用)
- 入り口での設置認可と認証評価制度の改善
恒常的な情報公表の促進



18歳人口の減少を踏まえた大学の規模や地域配置

- 大学の規模: あらゆる世代のための「知識の共通基盤」となりうることを見通した設定
 - ・本格的な人口減少: 18歳人口 120万人(2017) → 103万人(2030) → 88万人(2040)
 - ・2040年の大学進学者数推計は約51万人で、現在の約80%の規模に減少
 - ・リカレント教育による多様な年齢層の学生の増加に留意
- 国が描く将来像と地域で描く将来像
 - ・全都道府県の大学の配置状況に関する客観的なデータの作成(将来の入学者減の推計を含む)
 - ・地域の国公私立大学が、地方自治体、産業界を巻き込んで、将来像の議論や連携、交流の企画を行う恒常的な体制(「地域連携プラットフォーム(仮称)」)を構築
 - ・国は、地域の実情を踏まえた議論のためのデータや仕組みづくりを行った上で、各地域の議論を支援し、それらを踏まえた全体像を提示

高等教育機関の教育研究体制

- 多様な価値観が集まるキャンパスから新たな価値が生まれる
 - 自前主義から脱却し、学部を越え、大学を越えて多様な人的資源を活用
 - 18歳で入学する従来モデルから脱却し、社会人、留学生、障害のある学生など多様な年齢層の多様なニーズを持った学生への教育体制の整備

多様な教員

- ・実務家、若手、女性、外国籍など多様なバックグラウンドの教員の採用と質保証

多様な学生

- ・リカレント教育の充実
- ・留学生交流の推進
- ・学位等の国際通用性の確保
- ・高等教育機関の国際展開

多様で質の高い教育プログラム

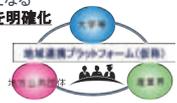
- ・学部等の組織の枠を越えた学位プログラム
- ・単位互換制度と「自ら開設」原則の考え方の整理
- ・教員は一つの学部にとり専任となる運用の緩和

大学の多様な強みの強化

- ・大学として中軸となる「強み」や「特色」を明確化

多様性を受け止めるガバナンス

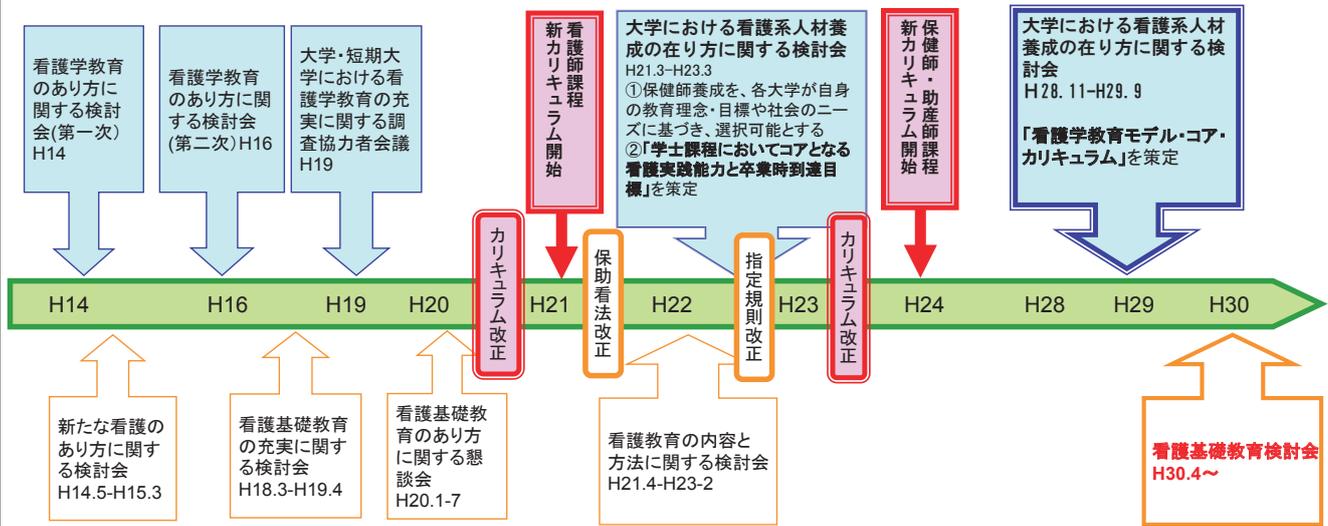
- ・他大学、産業界、地方公共団体との恒常的な連携体制の構築
- ・国立大学における一法人複数大学制度の導入、私立大学における学部単位での事業譲渡の円滑化、国公私を越えた連携を可能とする「大学等連携推進法人(仮称)制度」の創設
- ・客観的・複眼的な外部からの意見反映と多様な人材の活用による経営力強化のための学外理事の複数名登用促進



近年の看護師等養成制度改正及び看護教育行政の動き

文部科学省関係

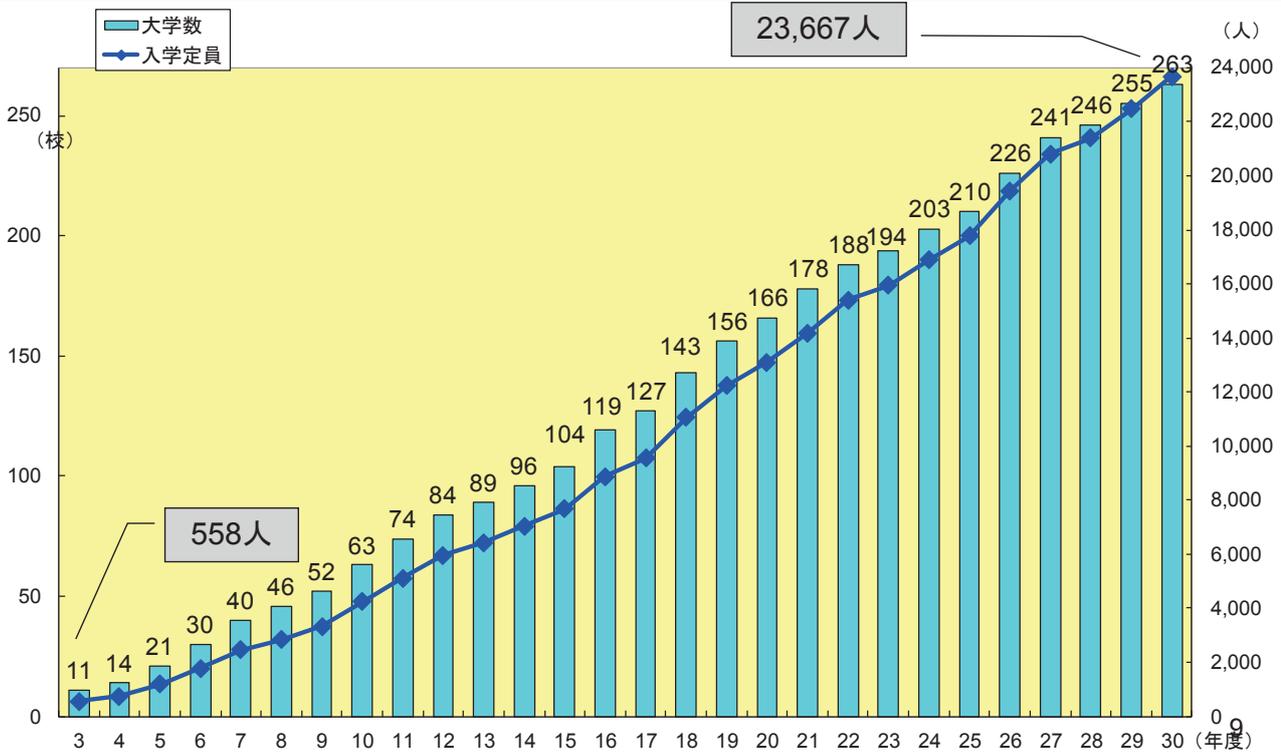
看護系大学における看護教育のさらなる充実



8

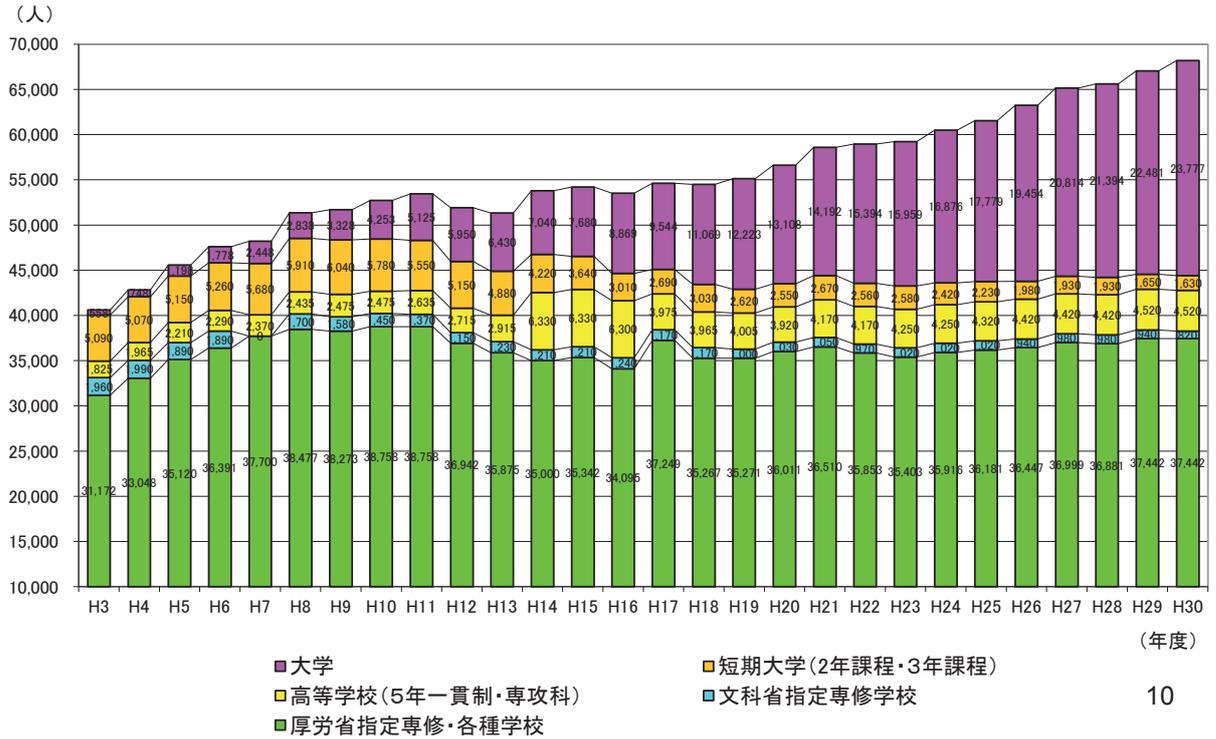
厚生労働省関係

看護系大学数及び入学定員の推移

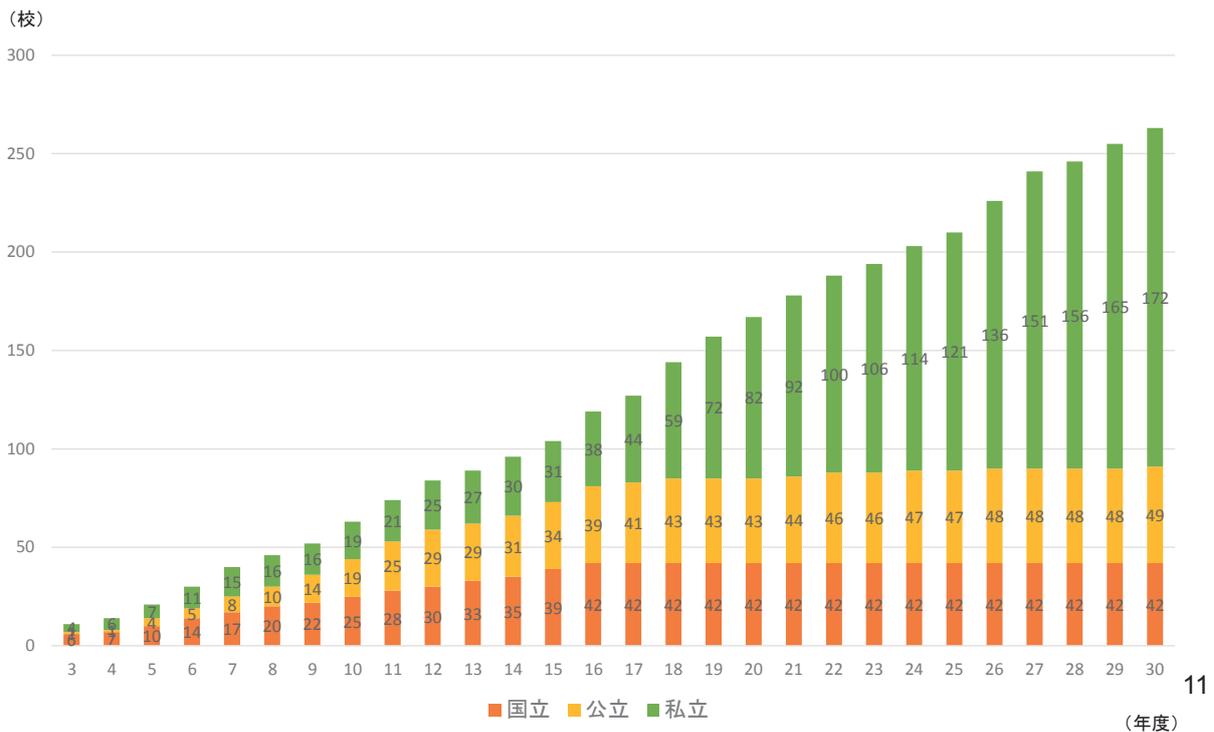


H30年度の教育課程数は、263大学、276課程(1大学で複数の教育課程を有する大学がある)

看護師学校・養成所の入学定員の推移 (平成30年5月現在)



国公立別看護系大学推移 (平成30年5月現在)



入学定員と編入学定員の推移

設置主体	編入年次	H26 (2014)		H27 (2015)		H28(2016)		H29(2017)		H30(2018)	
		編入学定員	入学定員	編入学定員	入学定員	編入学定員	入学定員	編入学定員	入学定員	編入学定員	入学定員
国立	2年	0		0		0		18		18	
	3年	365	2,894	341	2,894	323	2,894	303	2,894	295	2,893
	4年	0		0		0		0		0	
公立	2年	10		10		10		10		10	
	3年	218	3,832	188	3,842	183	3,842	159	3,854	154	3,904
	4年	0		0		0		0		0	
私立	2年	44		44		39		19		19	
	3年	218	12,728	220	14,078	215	14,658	228	15,733	198	16,870
	4年	5		0		0		0		0	
合計	2年	54		54		49		47		47	
	3年	801	19,454	749	20,814	721	21,394	690	22,481	647	23,667
	4年	5		0		0		0		0	

(単位:人)

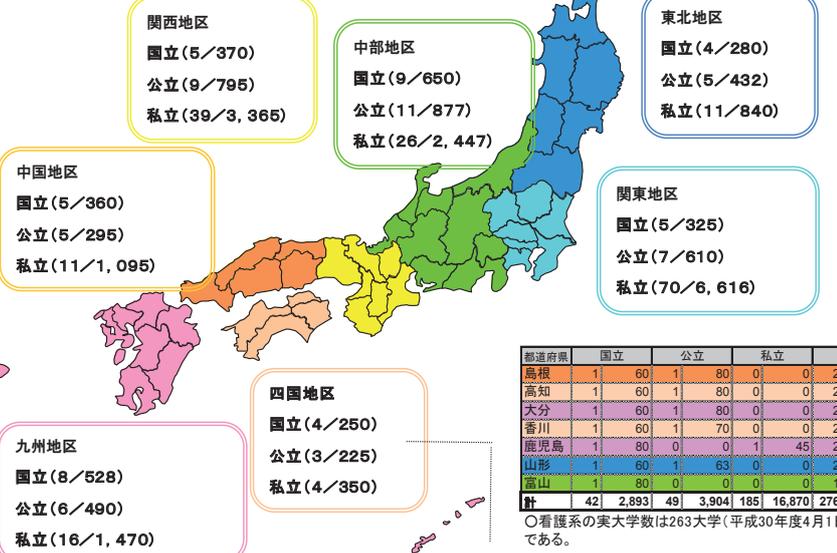
都道府県別看護系大学数 (H30年 263大学276課程)

国立 42大学(42課程)

公立 49大学(49課程)

私立 172大学(185課程)

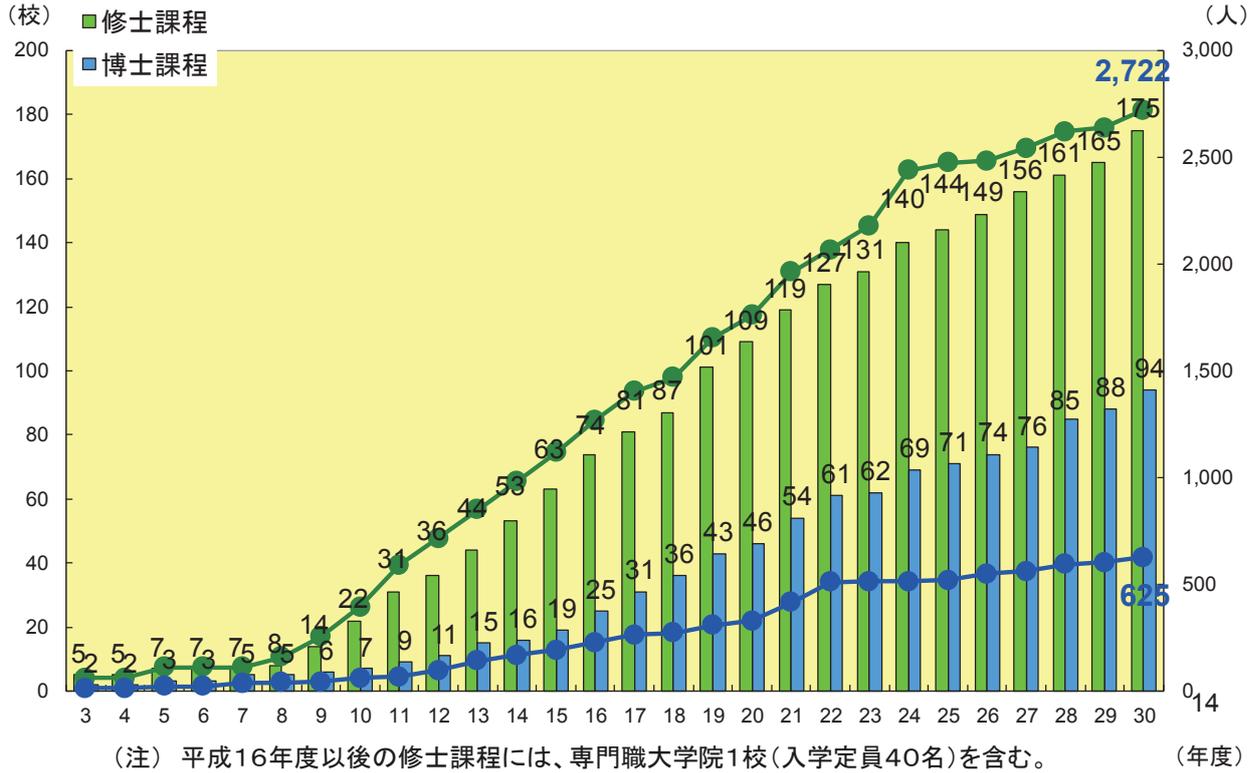
地区別()は、大学課程数/入学定員



都道府県	国立		公立		私立		合計	
	大学課程数	入学定員	大学課程数	入学定員	大学課程数	入学定員	大学課程数	入学定員
東京	2	95	1	80	23	2,236	26	2,411
千葉	1	80	1	80	16	1,585	18	1,745
大阪	1	80	2	175	13	1,175	16	1,430
兵庫	1	80	2	200	12	1,040	15	1,320
愛知	1	80	2	172	11	1,105	14	1,357
福岡	1	68	1	90	11	1,060	13	1,218
北海道	2	130	3	180	8	687	13	997
神奈川	0	0	2	190	10	900	12	1,090
埼玉	0	0	1	130	9	825	10	955
京都	1	70	1	85	7	560	9	715
広島	1	60	1	60	6	675	8	795
群馬	1	80	1	80	5	440	7	600
岐阜	1	80	1	80	5	420	7	580
青森	1	80	1	100	4	280	6	460
岡山	1	80	2	100	3	260	6	440
静岡	1	60	1	120	3	345	5	525
茨城	1	70	1	50	3	240	5	360
石川	1	80	2	190	2	150	5	360
栃木	0	0	0	0	4	390	4	390
新潟	1	80	1	95	2	197	4	372
三重	1	80	1	100	2	180	4	360
宮城	1	70	1	95	2	160	4	325
奈良	0	0	1	85	3	240	4	325
愛媛	1	60	1	75	2	160	4	295
福井	1	60	2	100	1	60	4	220
熊本	1	70	0	0	2	200	3	270
岩手	0	0	1	90	2	170	3	260
徳島	1	70	0	0	2	190	3	260
山梨	1	60	1	100	1	80	3	240
長野	1	70	1	80	1	90	3	240
秋田	1	70	0	0	2	150	3	220
沖縄	1	60	2	160	0	0	3	220
山口	1	80	1	55	1	80	3	215
滋賀	1	60	1	70	1	80	3	210
長崎	1	70	1	60	1	75	3	205
和歌山	0	0	1	80	1	90	2	170
福島	0	0	1	84	1	80	2	164
鳥取	1	80	0	0	1	80	2	160
宮崎	1	60	1	100	0	0	2	160
佐賀	1	60	0	0	1	90	2	150
計	42	2,893	49	3,904	185	16,870	276	23,667

○看護系の実大学数は263大学(平成30年度4月1日現在)である。

看護系大学院数及び入学定員の推移



文部科学省 MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

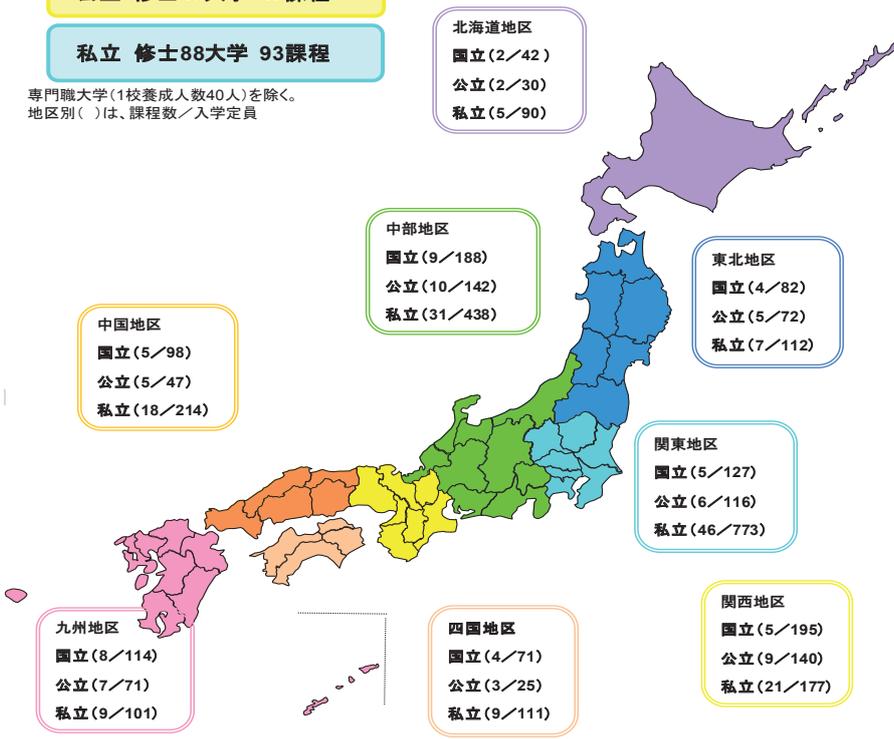
都道府県別看護系大学院数 修士課程 (H30年175大学182課程)

国立 修士41大学 42課程

公立 修士46大学 47課程

私立 修士88大学 93課程

専門職大学(1校養成人数40人)を除く。
地区別()は、課程数/入学定員

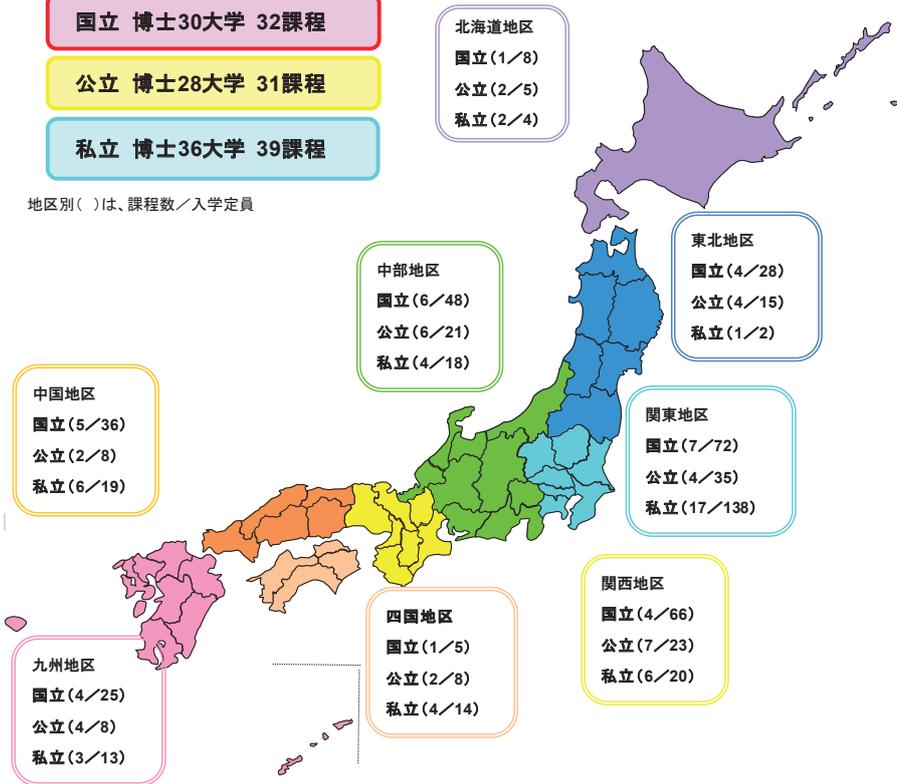


都道府県	国立		公立		私立		合計			
	修士課程数	入学定員	修士課程数	入学定員	修士課程数	入学定員	修士課程数	入学定員		
北海道	2	42	2	30	4	50	8	122		
青森			30	1	20		2	50		
岩手			1	15			1	15		
宮城			24	1	10	1	10	3	44	
秋田			1	12	1	12	2	24		
山形			1	12			2	28		
福島			1	15			1	15		
茨城			1	6	1	6	3	27		
栃木					3	118	3	118		
群馬			50	1	8	2	12	4	70	
埼玉					1	20	2	25	3	45
千葉	2	37			4	33	6	70		
東京	1	25	1	50	17	247	19	322		
神奈川			2	32	6	89	8	121		
新潟			20	1	15	2	46	4	81	
富山			1	16			1	16		
石川			70	1	10	1	6	3	86	
福井			1	12	2	18		3	30	
山梨			1	14	1	10		2	24	
長野			1	14	1	16	1	5	3	35
岐阜			1	8	1	12	1	9	3	29
静岡			1	16	1	16	1	10	3	42
愛知			1	18	2	45	6	82	9	145
三重			1	11	1	15	1	10	3	36
滋賀			1	16	1	8	1	6	3	30
京都			1	49	1	6	4	28	6	83
大阪			65	2	36	6	55	9	156	
兵庫			54	2	53	7	50	10	157	
奈良					1	10	2	28	3	38
和歌山					1	12		1	12	
鳥取			1	14				1	14	
島根			1	12	1	5		2	17	
岡山			2	26	2	12	3	24	6	62
広島			34	1	20	5	46	7	99	
山口			1	12	1	10		2	22	
徳島			1	27			2	15	3	42
香川			1	16	1	5		2	21	
愛媛			1	16	1	5		2	21	
高知			1	12	1	15		2	27	
福岡			20	1	12	7	79	9	111	
佐賀			1	16				1	16	
長崎			20	1	8			2	28	
熊本			1	16			2	22	3	38
大分			1	10	2	27		3	37	
宮崎			1	10	1	12		2	22	
鹿児島			1	12				1	12	
沖縄			1	10	2	12		3	22	
合計	42	917	47	643	93	1122	182	2682		

都道府県別看護系大学院数 博士課程 (H30年94大学102課程)

- 国立 博士30大学 32課程
- 公立 博士28大学 31課程
- 私立 博士36大学 39課程

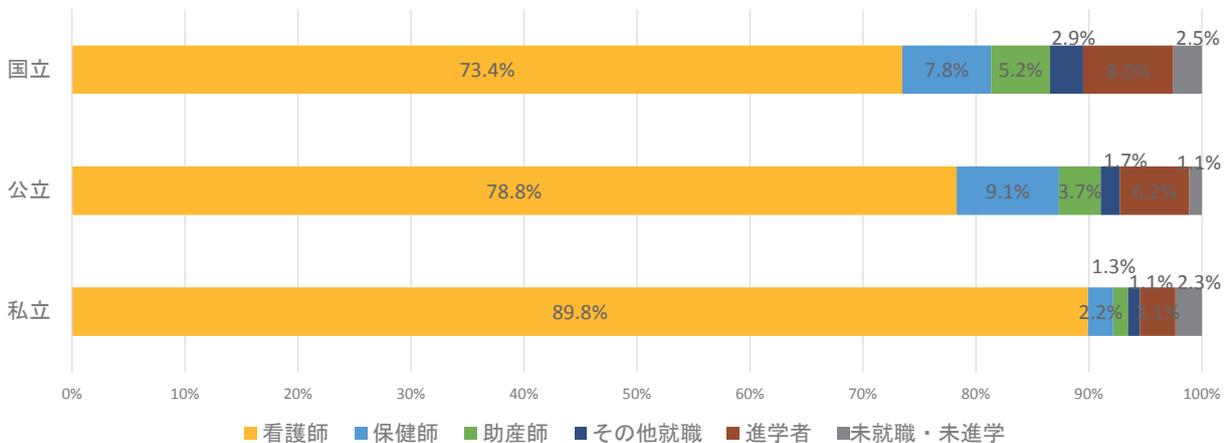
地区別()は、課程数/入学定員



都道府県	国立		公立		私立		合計	
	博士課程数	入学定員	博士課程数	入学定員	博士課程数	入学定員	博士課程数	入学定員
北海道	1	8	2	5	2	4	5	17
青森	12	1	4	1			2	16
秋田	1	3			1	2	2	5
岩手			1	5			1	5
宮城	10	1	3	1			2	13
山形	3	1	3	0			2	6
福島	0	0	0	0			0	0
茨城	8	1	5				2	13
群馬	10	1	2				2	12
栃木					2	52	2	52
千葉	2	14			1	7	3	21
東京	3	40	1	22	11	61	15	123
神奈川			1	6	3	18	4	24
新潟	6	1	3	1	3	3	12	13
富山	3						1	3
石川	25	1	3				2	28
山梨	4						1	4
長野	4	1	4				2	8
岐阜			1	2			1	2
静岡					1	5	1	5
愛知	6	2	9	2	10	5	25	25
三重	3						1	3
京都	15	1	3	1	3	3	21	21
大阪	23	2	8	2	8	5	39	39
兵庫	25	3	9	3	9	7	43	43
和歌山	1	1	3				1	3
鳥取	4						1	4
島根	2						1	2
岡山	10	1	5	2	5	4	20	20
広島	15			4	14	5	29	29
山口	5	1	3				2	8
徳島	1	5			1	3	2	8
高知			2	8			2	8
福岡	1	10			2	10	3	20
長崎			1				1	0
熊本	1	6					1	6
大分			2	4			2	4
宮崎			2				0	2
鹿児島	1	6					1	6
沖縄	1	3	1	2			2	5
合計	32	288	31	123	39	214	102	625

看護系大学卒業者の卒業状況

	学校数	卒業者数	就職者数	卒業者の内訳					
				看護師	保健師	助産師	その他就職	進学者	未就職・未進学
国立	42	2,972	2,660	2,182	233	155	87	237	75
公立	49	3,828	3,571	3,015	349	142	65	214	43
私立	186	13,051	12,319	11,720	291	170	138	421	311
合計	277	19,851	18,550	16,917	873	467	290	872	429



出典:平成30年度概況調査(平成30年5月1日現在)

看護学教育モデル・コア・カリキュラム ～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」 の修得を目指した学修目標～

18

「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」の策定について

1. 「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」とは

- 全国の看護系大学が学士課程における看護師養成教育において共通して取り組むべき内容を抽出し、各大学のカリキュラム作成の参考として示したもの
- 学生が卒業時まで身に付けておくべき必須の看護実践能力について、その修得のための具体的学修目標を提示

2. 策定の背景

- 看護系大学の急増に伴い、教育水準の維持向上が課題
(平成3年11校→平成29年255校)
- 地域包括ケアシステムの構築、多職種連携・チーム医療の推進、更なる医療安全の要請等の社会の変化に対応し、看護師として必要となる能力を備えた質の高い人材養成が必要



平成28年10月から有識者会議を設置し、大学の学士課程における看護師養成教育の充実と社会に対する質保証に資するため「モデル・コア・カリキュラム」の策定に向けて検討
パブリックコメントの結果も踏まえ、とりまとめ。平成29年10月公表
平成31年度から、各大学において「モデル・コア・カリキュラム」を踏まえたカリキュラムが順次開始

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会・看護学教育モデル・コア・カリキュラム策定ワーキンググループ(文科省)

<検討事項>

1. 看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定について
2. 看護学教育モデル・コア・カリキュラムの周知について
3. その他

<経過>

第1回検討会 平成28年11月7日

- ・座長選任、開催趣旨等
- ・モデル・コア・カリキュラムの策定について(検討の方向性)

第1回WG 平成28年12月22日

- ・検討会(第1回)の報告について
- ・看護系人材として求められる基本的な資質・能力及びモデル・コア・カリキュラムの骨格について

第2回WG 平成29年2月21日

- ・モデル・コア・カリキュラムの項目について

第2回検討会 平成29年3月13日

- ・モデル・コア・カリキュラムの項目案等の報告
- ・総括的な審議

第3回WG 平成29年4月28日

- ・モデル・コア・カリキュラムのWG案を作成

平成29年6月15日

第3回検討会

- ・モデル・コア・カリキュラム案等の報告
- ・総括的な審議

平成29年6～7月

- ・パブリックコメント実施

平成29年8月

第4回検討会

- ・最終案取りまとめ

平成29年10月以降

- ・大学へ周知

平成31年4月

- ・大学において看護学教育モデル・コア・カリキュラム²⁰を踏まえたカリキュラム開始



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会・看護学教育モデル・コア・カリキュラム策定ワーキンググループ(文科省)

<検討会委員>

- 秋山 正子 株式会社ケアーズ白十字訪問看護ステーション
代表取締役・統括所長
- ◎浅田 尚紀 公立大学法人兵庫県立大学理事・副学長
- 阿真 京子 一般社団法人知ろう小児医療守ろう子ども達の会
代表
- 井村 真澄 日本赤十字看護大学・大学院教授
- 江藤 宏美 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授
- 嘉手苺 英子 沖縄県立看護大学学長
- 上泉 和子 公立大学法人青森県立保健大学理事長・学長
- 萱間 真美 聖路加国際大学大学院看護学研究科長
- 川本 利恵子 公益社団法人日本看護協会常任理事
- 小泉 仁子 筑波大学附属病院副病院長・看護部長
- 齋藤 宣彦 医療系大学間教養試験実施評価機構副理事長
- 佐々木 幾美 日本赤十字看護大学看護学部長
- 奈良間 美保 名古屋大学大学院医学系研究科教授
- 野村 美千江 愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科長
- 菱沼 典子 公立大学法人三重県立看護大学理事長・学長
- 南 砂 読売新聞東京本社取締役調査研究本部長
- 宮崎 美砂子 千葉大学大学院看護学研究科長
- 柳田 俊彦 宮崎大学医学部看護学科教授

<ワーキンググループ委員>

- ◇内布 敦子 公立大学法人兵庫県立大学理事兼副学長
- 大湾 明美 沖縄県立看護大学看護学部長
- 小山田 恭子 東邦大学看護学部准教授
- 叶谷 由佳 横浜市立大学大学院医学研究科教授
- 亀井 智子 聖路加国際大学大学院看護学研究科教授
- 黒田 久美子 千葉大学大学院看護学研究科准教授長
- 佐々木 幾美 日本赤十字看護大学看護学部長
- 澤井 美奈子 湘南医療大学保健医療学部看護学科准教授
- 奈良間 美保 名古屋大学大学院医学系研究科教授
- 柳田 俊彦 宮崎大学医学部看護学科教授
- 渡邊 典子 新潟青陵大学看護学部看護学科教授

◎検討会座長 ○検討会副座長

◇WG座長
(敬称略)

<オブザーバー>

- 島田 陽子 厚生労働省医政局看護課長



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

看護学教育モデル・コア・カリキュラムの定義

看護系の全ての大学が看護師養成のための教育（保健師、助産師、看護師に共通して必要な基礎となる教育を含む）において、

共通して取り組むべきコアとなる内容を抽出し、

各大学におけるカリキュラム作成の参考となるよう

学修目標を列挙したもの

22

看護学教育モデル・コア・カリキュラムの考え方

1. 「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」（H23年）を内包し、この看護実践能力の修得に必要な学修目標を、「モデル・コア・カリキュラム」として看護系大学関係者をはじめ広く国民に対して提示することを目的とする
2. 平成23年以降の看護学や医療、社会の進展を踏まえ、新たに盛り込むべき事項を加える
3. モデル・コア・カリキュラムの大学教育における位置づけ：
各大学は、授業科目等の設定、教育手法や履修順序等を自主的に編成するものである。カリキュラム編成、評価の過程において、本モデル・コア・カリキュラムに示した学修目標を参考として活用することを期待

23

看護学教育モデル・コア・カリキュラムの概要

1. 多様なニーズに応える看護系人材を養成する教育内容
2. 学生が卒業時まで身に付けておくべき必須の看護実践能力について、その修得のための具体的学修目標を提示
3. 250校を超える看護系大学での実行可能性を考慮
4. 学士課程における医療系人材養成として、将来的には医学教育、歯学教育、薬学教育のモデル・コア・カリキュラムとの、同時改訂・一部共有化を見据えた構成

24

医学教育、歯学教育、薬学教育の モデル・コア・カリキュラムとの対比

看護学教育モデル・コア・カリキュラム	医学教育モデル・コア・カリキュラム (H28年度改訂版)	歯学教育モデル・コア・カリキュラム (H28年度改訂版)	薬学教育モデル・コアカリキュラム (H25年度改訂版)
看護系人材として求められる基本的な資質・能力	医師として求められる基本的な資質・能力	歯科医師として求められる基本的な資質・能力	薬剤師として求められる基本的な資質
A 看護系人材として求められる基本的な資質・能力	A 医師として求められる基本的な資質・能力	A 歯科医師として求められる基本的な資質・能力	A 基本的な事項
B 社会と看護学	B 社会と医学・医療	B 社会と歯学	B 薬学と社会
C 看護の対象理解に必要な基本的知識	C 医学一般	C 生命科学	C 薬学基礎
D 看護実践の基本となる専門基礎知識	D 人体各器官の正常構造と機能、病態、診断、治療	D 歯科用医療機器(歯科生体材料、歯科材料・器械)	D 衛生薬学
E 多様な場における看護実践に必要な基本的知識	E 全身におよぶ生理的変化、病態、診断、治療	E 臨床歯学	E 医療薬学
F 臨地実習	F 診療の基本	F シミュレーション実習(模型実習・相互演習(実習))	F 薬学臨床 ※コアカリキュラムとは別に「薬学実務実習に関するガイドライン」を平成26年度に策定
G 看護学研究	G 臨床実習 ※「診療参加型臨床実施実習ガイドライン」(参考例)を含む	G 臨床実習	G 薬学研究

25

看護学教育モデル・コア・カリキュラムの構成

(生涯を通して) ○看護系人材として求められる基本的な資質・能力

保健・医療・福祉等の分野において、人々の健康で幸福な生活の実現に向けて貢献できる看護系人材

卒後

学士課程卒業時 **A 看護系人材(看護職)として求められる基本的な資質・能力**

様々な場面で人々の身体状態を観察・判断、状況に応じて適切な対応ができる看護実践能力

Aに示される資質・能力の修得につながる学修目標

B 社会と看護学

健康の概念、ライフスタイルと健康
法律・制度、社会における看護職の役割、倫理・個人情報保護等

C 看護の対象理解に必要な基本的知識

看護とは、生活者としての人間理解
身体・心の側面からの人間理解
生体機能・健康障害の種類・薬理・放射線 等

D 看護実践の基本となる専門基礎知識

看護過程、看護基本技術、対象特性別(発達段階・健康の段階)の看護、組織における看護活動 等

E 多様な場における看護実践に必要な基本的知識

多様な場に応じた看護、地域包括
ケア災害時の看護実践 等

F 臨地実習

看護の知識・技術の統合、ケアへの参画、チーム医療の一員としての自覚 等

G 看護学研究

看護研究における倫理、看護研究を通じた看護実践の探究 等

「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標

26

○看護系人材として求められる基本的な資質と能力

1. プロフェッショナリズム
2. 看護学の知識と看護実践
3. 根拠に基づいた課題対応能力
4. コミュニケーション能力
5. 保健・医療・福祉における協働
6. ケアの質と安全の管理
7. 社会から求められる看護の役割の拡大
8. 科学的探究
9. 生涯にわたって研鑽し続ける姿勢

27

A 看護系人材(看護職)として求められる基本的な資質・能力

ねらい 学士課程における看護系人材としての資質・能力を獲得するための学習内容とその到達レベルを定める

- A-1 プロフェッショナリズム
- A-2 看護学の知識と看護実践
- A-3 根拠に基づいた課題対応能力
- A-4 コミュニケーション能力
- A-5 保健・医療・福祉における協働
- A-6 ケアの質と安全の管理
- A-7 社会から求められる看護の役割の拡大
- A-8 科学的探究
- A-9 生涯にわたって研鑽し続ける姿勢

28

B 社会と看護学

ねらい 社会を形作る文化や制度と健康の関連について学び、看護学の基礎となる知識を修得する。また、社会における看護職の役割について学ぶ

- B-1 人々の暮らしを支える地域や文化
- B-2 社会システムと健康
- B-3 社会における看護職の役割と責任

B項目の焦点

人の生活に影響する地域特性、地域・環境と健康との関係、ライフスタイルと健康の関係、社会資源、保健・医療・福祉制度の概要、疫学・統計、社会における看護職の役割、国際社会における看護

29

C 看護の対象理解に必要な基本的知識

ねらい 人間の生活者としての側面及び生物学的に共通する人間の身体的・精神的な側面を統合して理解するために必要な知識を修得し、取り巻く様々な環境からの影響を受けて存在する人間を包括的に理解する。このような人間理解を基盤として、健康に関与するための看護の理論を学び、看護の基本を理解する

- C-1 看護学に基づいた基本的な考え方
- C-2 生活者としての人間理解
- C-3 生物学的に共通する身体的・精神的な側面の人間理解
- C-4 疾病と回復過程の理解
- C-5 健康障害や治療に伴う人間の身体的・精神的反応の理解

30

D 看護実践の基本となる専門基礎知識

ねらい 看護学を構成する概念である人間、環境、健康、看護の理解を基盤として、課題解決技法等の基本を踏まえて、看護の対象となる人のニーズに合わせた看護を展開(実践)する能力を育成する。健康の段階、発達段階に特徴づけられる対象者のニーズに応じた看護実践能力を修得するとともに、組織における看護職の役割と対象者を中心とした協働の在り方を身に付ける

- D-1 看護過程の展開の基本
- D-2 基本的な看護技術
- D-3 発達段階に特徴づけられる看護実践
- D-4 健康の段階に応じた看護実践
- D-5 心のケアが必要な人々への看護実践
- D-6 組織における看護の役割

31

E 多様な場における看護実践に必要な基本的知識

ねらい 看護を提供する場は医療機関、在宅、保健機関、福祉施設、産業・職域、学校、研究機関等多様となっている。また、グローバル化により、在日外国人に対してや諸外国での保健・医療活動等、国境を越えた看護実践の機会も増えている。これら看護が求められる多様な場を理解するとともに、看護実践を行うために必要な専門知識を身に付け、対象者の特性を加味した上で場の複雑性を認識しながら、対象者のニーズに応えるための看護実践を理解する

E-1 多様な場の特性に応じた看護

E-2 地域包括ケアにおける看護実践

E-3 災害時の看護実践

E項目の焦点

多様な場の特性、住み慣れた地域で暮らしを続けるための看護、
災害看護 32

F 臨地実習

ねらい 臨地実習は看護の知識・技術を統合し、実践へ適用する能力を育成する教育方法のひとつである。看護系人材として求められる基本的な資質と能力を常に意識しながら多様な場、多様な人が対象となる実習に臨む。その中で知識・技術の統合を図り、看護の受け手との関係形成やチーム医療において必要な対人関係能力や倫理観を養うとともに、看護専門職としての自己の在り方を省察する能力を身に付ける

F-1 臨地実習における学修

F-2 ケアへの参画

チームの一員としてケアに参画することを通じて、多様なニーズを持つケアの受け手に対応するための基礎的能力を育成するとともに、チームの一員として活動できる態度を養う。

F項目の焦点

座学での学びを踏まえた看護実践能力の定着化、チームの一員としての自覚、医療安全 33

G 看護学研究

ねらい 看護学研究の成果は、看護実践の根拠として看護の対象である人々への支援に還元される。また、社会における看護の必要性を示すとともに看護を説明することを可能にする。そのため、看護学の体系を構築する基盤となり、看護学の専門性の発展に貢献する。また、看護学研究の実践を通して、より良い看護を探求する課題解決の能力を向上させる。学士課程においては、将来的な種々の研究活動の基盤をつくることに焦点がある

G-1 看護研究における倫理

G-2 看護研究を通じた看護実践の探究

34

看護学教育モデル・コア・カリキュラムの活用

1. 学修時間数の3分の2程度になるように精選
2. 各大学の3P(アドミッション・カリキュラム・ディプロマポリシー)に照らし合わせ、科目ごとの学修目標を検討する際に参考にし、学習内容の充実につなげる

➤ 看護学教育モデル・コア・カリキュラム対応チェックシート

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kango/1217788

35

「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー), 「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン (平成28年3月31日)

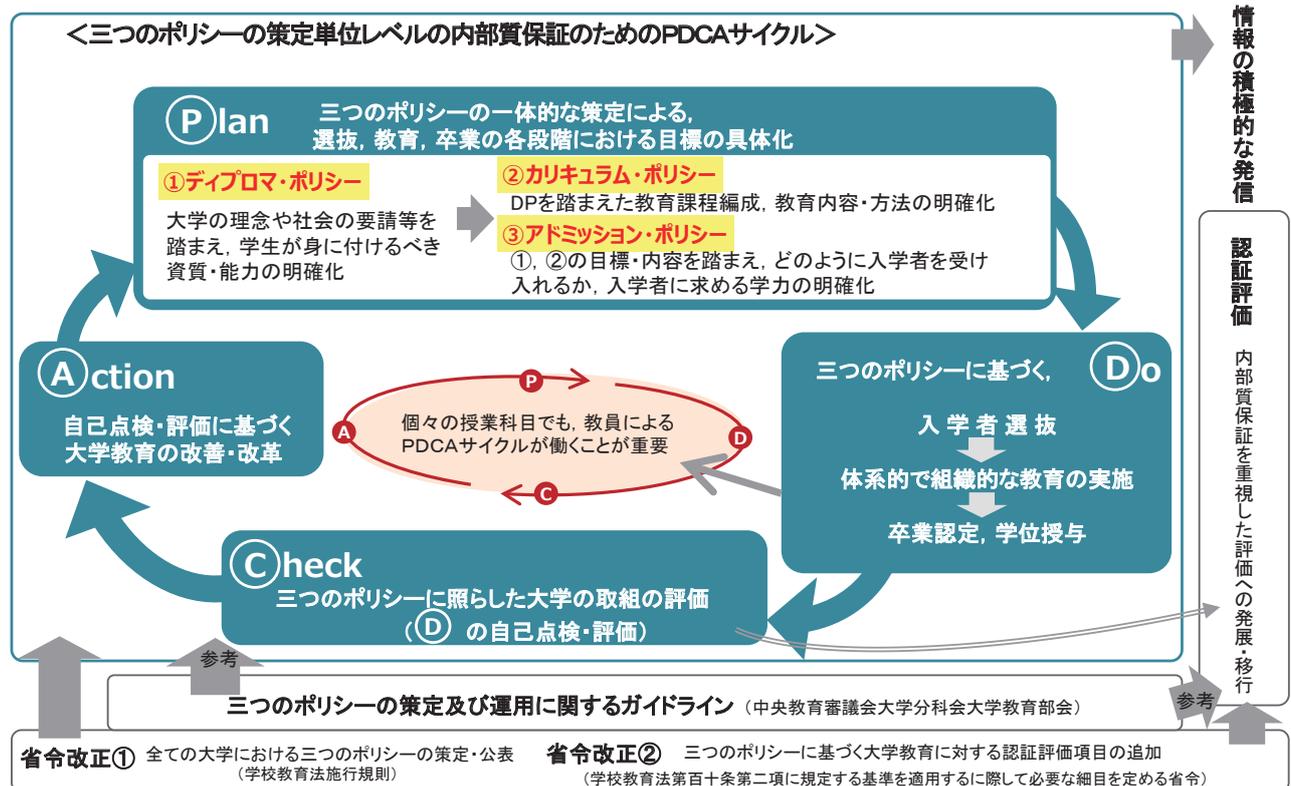
- 学校教育法施行規則 第165条の2
- 全ての大学等において、3つのポリシーを一貫性のあるものとして策定し、公表する(平成29年4月1日施行)

ディプロマ・ポリシー	各大学がその教育理念を踏まえ、どのような力を身に付ければ学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの
カリキュラム・ポリシー	ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施するのかを定める基本的な方針
アドミッション・ポリシー	各大学が、当該大学・学部等の教育理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、入学者を受け入れるための基本的な方針であり、受け入れる学生に求める学習成果(学力の3要素※)を示すもの。 ※ (1)知識・技能, (2)思考力・判断力, 表現力等の能力, (3)主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

36

「三つのポリシー」に基づく大学教育改革の実現 (イメージ案)

三つのポリシー … 卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー), 教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー), 入学者の受入れ方針(アドミッション・ポリシー)



37

看護学教育モデル・コア・カリキュラムの活用により
継続的な質の高い看護職養成に
つながることを願っています

ご清聴いただきありがとうございました

38

8. 報告「外部指針をCQIにどのように使うか」

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

黒田 久美子

当センターでは、文部科学省委託事業（平成 27～29 年度）「医療人養成の在り方に関する調査研究」を実施し、学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発に取り組んだ。その結果、各看護系大学が「到達目標 2011」をどのように活用しているのかを調査し、どのように活用できるのかを見出した。

現在、「看護学教育のモデル・コア・カリキュラム」をはじめとする多様な外部指針が出されている。それらが有効に活用されることで、CQI（Continuous Quality Improvement：看護学教育の継続的質改善）が推進されると考える。

ワークショップ参加者に外部指針は自大学のありたい姿に向かう CQI への推進に多様に活用していく手段として活用してほしいと考え、看護系大学における『到達目標 2011』の活用の実態を通して、外部指針をCQIにどのように活用できるかを報告した。

2018年10月29日

平成30年度看護学教育ワークショップ

外部指針をCQIに どのように使うか

黒田 久美子



- 2011年3月 「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標(以下、「到達目標2011」)」提示
- 文部科学省委託事業(平成27～29年度)
「医療人養成の在り方に関する調査研究」
学士課程における看護実践能力と卒業時到達目標の達成状況の検証・評価方法の開発
- 各看護系大学が「到達目標2011」をどのように活用しているのかを調査し、どのように活用できるのかを見出した
- 現在、多様な外部指針が出されている
- 外部指針の一つである「到達目標2011」の活用を通して、外部指針をCQIにどのように活用できるかを報告する



全国調査の結果より

- 「到達目標2011」を活用している回答者では、「看護学教育の質確保のための取り組みを実施している」と回答した者が多く、有意差がみられた。(p<0.05***)
- 「到達目標2011」を活用していない回答者でも、参照等をしており、活用の自覚や、自大学の教育評価への適用の判断が重要である
- 保護者、関係者への教育の説明時に活用している



後向き事例研究の結果より

- 自律的な教育の質評価には、大学の置かれた状況（地域の事情、教育体制、方針等）の分析が前提としてあり、それが自大学の卒業時到達目標の評価への動機となる
- 外部指針をどのように使うとよいのかがわかり、自大学の教育方針のもとで活用方法が決まる



組織的にCQIに取り組む看護系大学の 前向き事例研究の結果より

- 自律的な教育の質改善には、前提として大学教育や自大学の理念、3Pへの理解が前提となる
- 外部指針の共有が、自大学のCQIについてのディスカッションの契機となる、教育の質評価をするタイミングとなる
- それが、教員・関係者間での合意形成の手段や契機となる



昨年度のWS参加者の参加後の意見より

- あらためて「到達目標2011」を参照し、活用を知ることによって、他の教員に伝えたり、以下のような質改善に向けた変化の様相があった。
 - －自大学の3Pの点検
 - －自大学の卒業到達目標で重視していることの気づき
 - －教育内容の点検と、体制やシステム不備の気づき
 - －教員間での話し合いの重要性、話し合う際の共通言語の必要性の気づき



看護学教育研究共同利用拠点 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

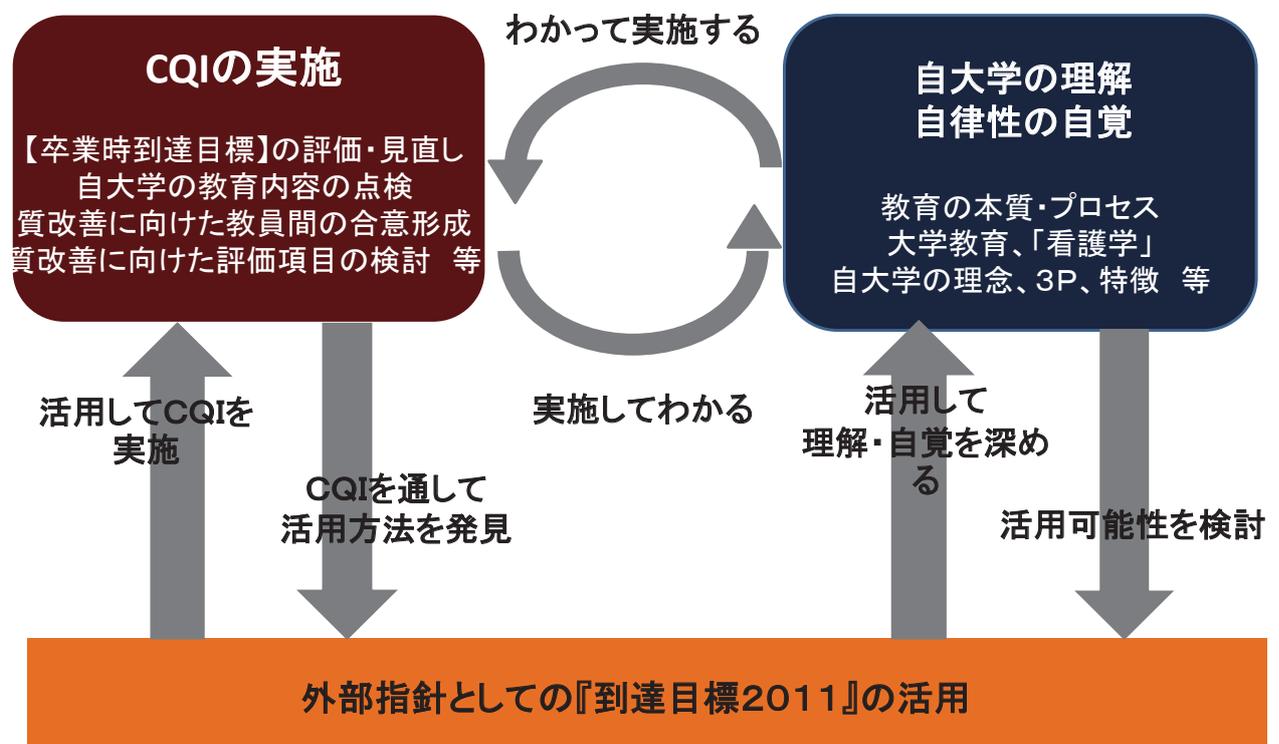


図 看護系大学における『到達目標2011』の活用の実態

外部指針をCQIにどのように使うか

- 自大学に適した卒業時到達目標、教育内容等を検討時の参照や点検
- 外部指針と比較することで、自大学の特徴、強み、伝統などを見直す
- 関係者*に、自大学の教育等を説明する際、背景である指針として示す
 - * 学生、教員、保護者、実習施設、地域関係者等
- 外部指針は、CQIのプロセスにおいて、契機にしたり、合意形成や取組の手段とする



9. 報告「CQI 取り組み事例の紹介と CQI モデルの事例への適用」

熊本保健科学大学保健科学部看護学科 教授 中村京子氏
熊本保健科学大学保健科学部看護学科 准教授 荒尾博美氏
司会進行 看護実践研究指導センター 和住淑子

当センターは、本看護学教育ワークショップの他に、看護系大学教員向け研修として、昨年度より「看護系大学 FD 企画者研修」を実施している。本日、CQI 取り組み事例を紹介くださる熊本保健科学大学保健科学部看護学科の中村先生、荒尾先生は、昨年度、この「看護系大学 FD 企画者研修」を受講され、自大学の現状を分析し、必要な FD 企画を立案された。当時はまだ CQI モデル Ver.1 はできていなかったが、研修の中で、両先生の自組織の現状の見方が大きく転換し、確かに CQI の推進力を得ることができた、との手応えを感じた。

そこで、本ワークショップでは、改めて中村先生、荒尾先生をお招きし、ご自身たちが気になっていたことを含む自大学の現状についてどのように振り返り、その結果、どのように現状認識が深まり、学生・教員・大学・地域のありたい姿が見えてくるようになったのかについて、「FD 企画者研修からの学び 見かたが変わる！」と題してご報告いただいた。両先生の報告内容については、以下のパワーポイント原稿を参照されたい。

FD企画者研修からの学び 見かたが変わる！



熊本保健科学大学保健科学部看護学科
中村京子 荒尾博美



熊本保健科学大学看護学科の沿革

- 1983年（S 58年）銀杏学園短期大学看護科新設
（2年制 進学課程）
- 2003年（H 15年）熊本保健科学大学開学（4年制大学）
- 2018年（H 30年）看護学科第16期生入学
看護学科卒業生約1400人



熊本保健科学大学

- 所在地：熊本市北区和泉町325番地
- 保健科学部 医学検査学科，看護学科
リハビリテーション学科（PT・OT・ST専攻）
大学院 保健科学研究科 保健科学専攻
助産別科
認定看護師養成課程（脳卒中リハ，認知症）
- 学生数合計 1525名（平成30年10月）
- 教職員数 約160名（特任教員，海外留学，育休除く）

本学のミッション

保健医療分野の教育と研究を通して社会に貢献できる
医療技術者を養成する

基本理念

「知識」「技術」「思慮」「仁愛」

看護学科 学生の背景

- 熊本県出身者は約7割
- 受験・入学の理由の上位は、
「国家試験受験資格の取得」
「国家試験合格率が高い」
「大学で学びたい」
「授業料が安い」
「就職状況が良い」
- 熊本県内での就職は、4～6割

熊本保健科学大学における教育改革

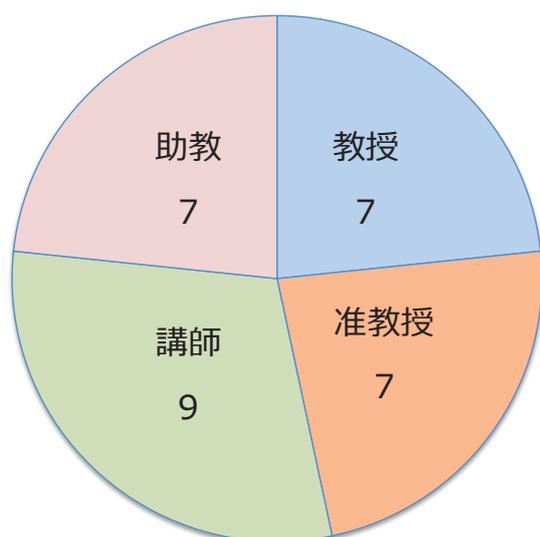
キャッチフレーズ

「10年後、20年後も選ばれ続ける大学であるために」

- ◇大学の特色を明確化、ブランド力の強化
大学の使命(ミッション)、将来像(ビジョン)など
- ◇専門科目内容の見直し、時間数削減
- ◇アクティブラーニングの積極的導入



看護学科教員の構成



- 教育歴5年未満の教授・准教授 3名
- 教育歴3年未満の助教 3名
- 年齢は40～50歳代が多い

(平成29年度)



自大学の現状把握のプロセス

学科長に研修参加を勧められ、
考え始めた・・・



F D企画者研修に応募した時点で 考えていたこと

- 本学看護学科教員は、看護実践能力は兼ね備えていると考えられるが、看護学に関する教授能力は発展途上にあるのではないか
- 実習指導以外について自己の教授能力を認識する機会は少なく、F Dの必要性を適切に認識できていないかもしれない
- 教育改革が進む中で、教員としての役割を果たしていくためには自己の能力を認識し、その向上を目指した活動を行うことが課題である



平成29年度FD企画者研修

- 全国から5大学

まさか選ばれるとは・・・



熊本保健科学大学
Kumamoto Health Science University

研修 I で説明した自大学の特徴

- 教員は現場経験・教育歴がバラバラ
- 地方の大学で教員確保が難しい
- 若手教員は出産・育児で精一杯
- 教員が同じ方向に向いていない
- 少子化で受験者数は減る傾向
- 国試合格率100%を目指しているが数名不合格
- 「附属病院がない」「学生数が多い」→教員の負担が大きい
- 多様な学生、学力が高くない学生に手がかかる

足りないものだけを気にしていませんか？



熊本保健科学大学
Kumamoto Health Science University

研修を通じて気づいたこと

- 競合校が少なく、定員割れしていない
 - 熊本市内病院の最大の看護師の供給大学で、地域に貢献できている
 - 若手教員は出産しても離職していない
 - 多様な学生に対応し、国試合格率が高い
- ⇒ **うちの大学は、まあまあ恵まれた大学だ**
- **卒業生の特徴を説明できない**
 - 教員の違いはむしろ強みになりそうだ



2人で取り組んで良かったこと

- 討議することで、考えを広げたり深めることができる
- いただいた助言についてその内容を確認したり補足しあえる
- 資料の作成などの作業は分担できるため、一人の負担は軽くなる



足りないものではなく、
積み上げたものを確認することに変更

本学看護学科教員が大学教員として能力を
自己評価し、FDの必要性を認識できる



4年間の教育成果を把握し、選ばれる大学を
目指すための課題を検討する



めざすところ（教育の成果）の変更

卒業

国家試験合格率100%

就職率100%



熊本を支える看護職を育てる

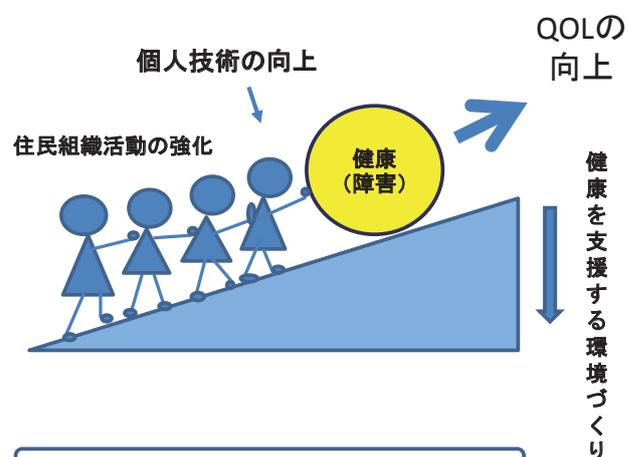
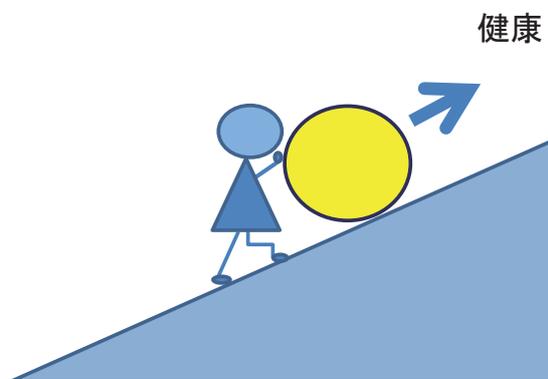


見えるものが変わったイメージ



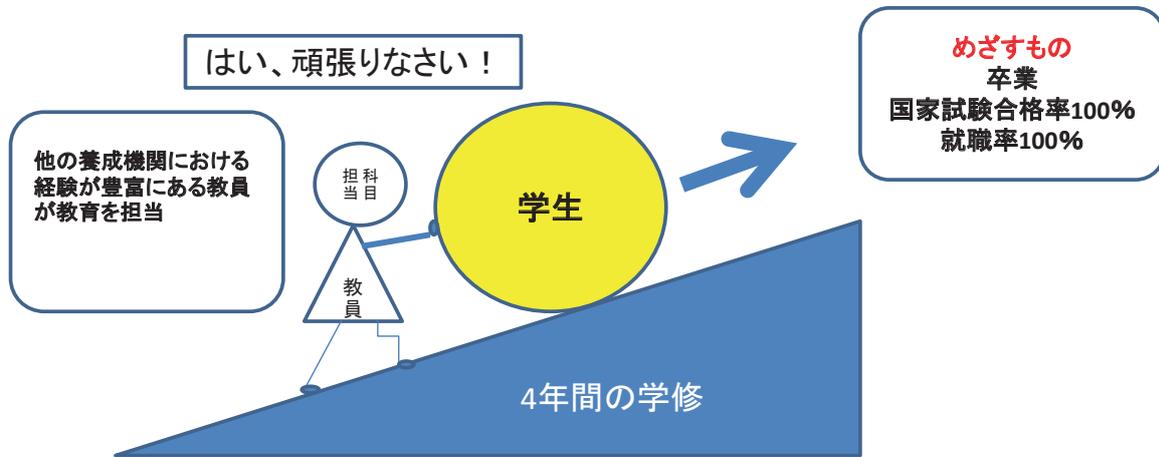
• 従来の健康づくり

• ヘルスプロモーション



島内1987. 吉田・藤内1995. の図を参考に作成

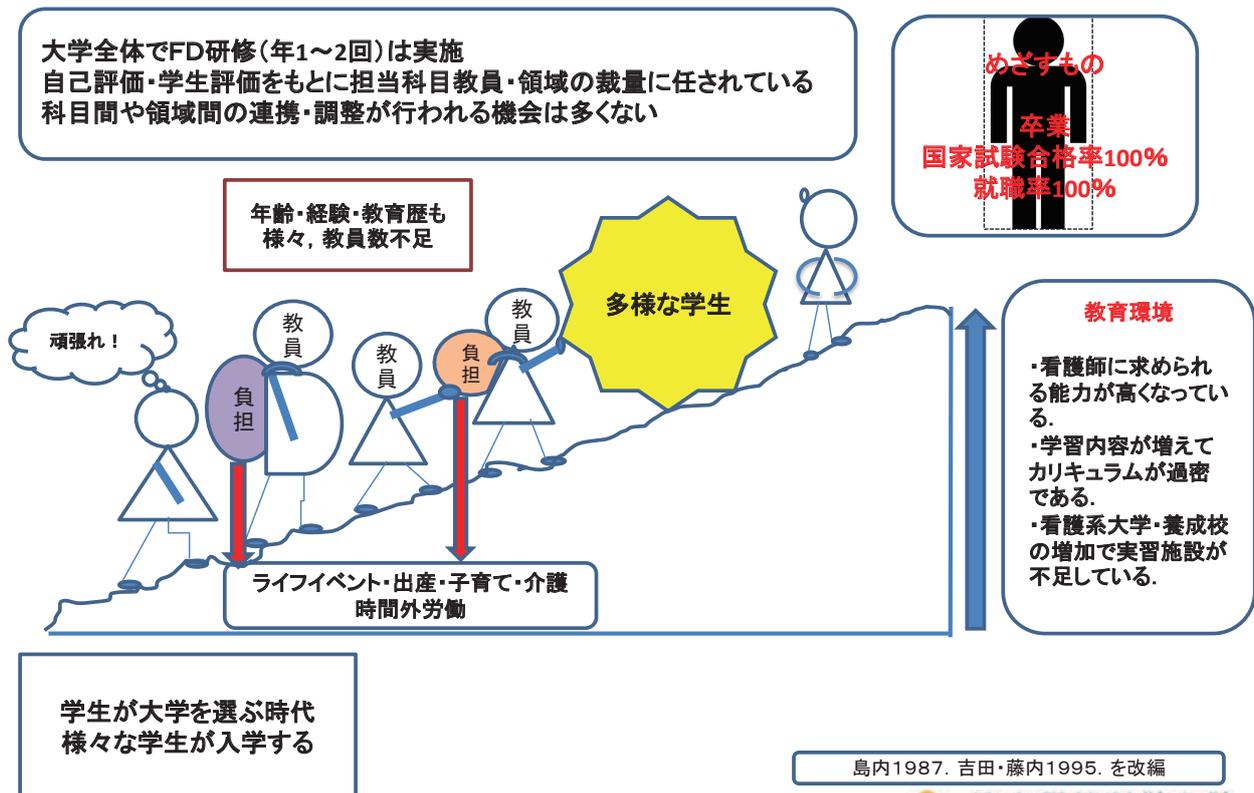
以前



島内1987. 吉田・藤内1995. を改編



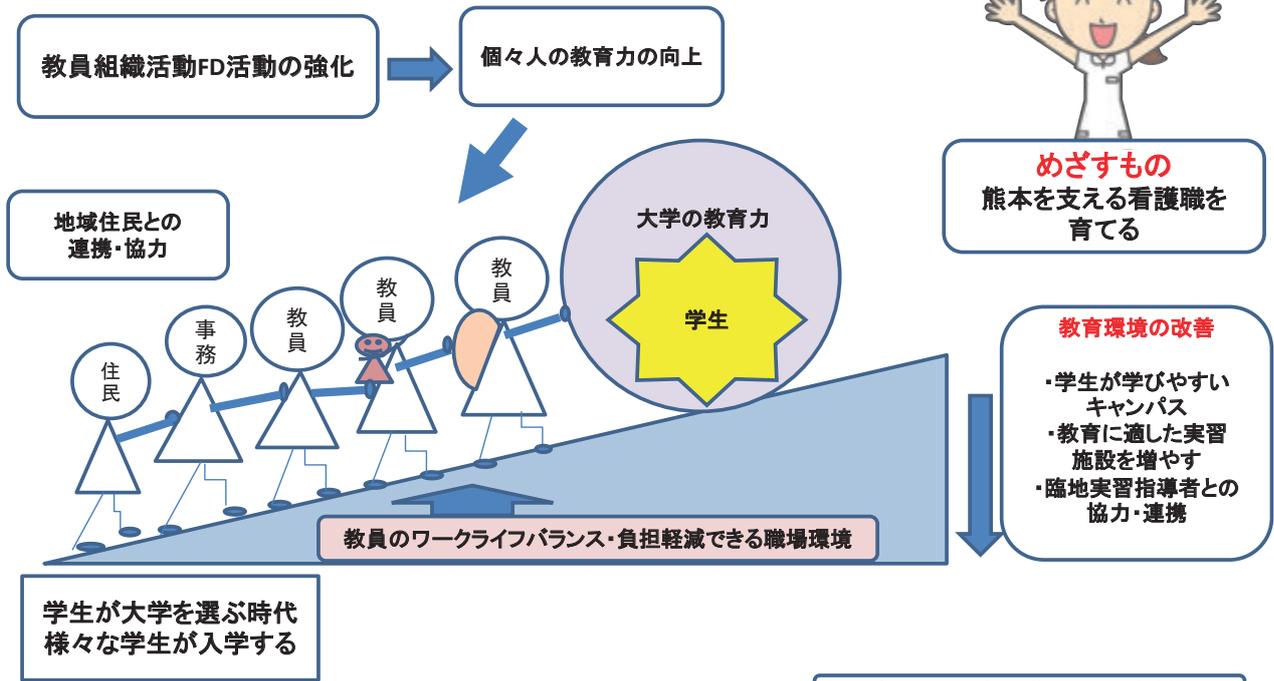
現在



島内1987. 吉田・藤内1995. を改編



これから（期待）



島内1987. 吉田・藤内1995. を改編



見えていないものに気づく

学生がどんな力を身につけて
卒業しているのか知らなかった・・・



まず取り組むべきと考えたこと

「4年間の教育成果を把握し、選ばれる大学を目指すための課題を検討する」ためにまず必要なのは、どのような教育を行ったか、4年間の教育成果（卒業時どのような力を身に付けているか）を把握すること



今年度のFD企画

現行カリキュラムにおける教育成果を学科教員全員で確認するために、平成29年度に看護学科教員が担当した授業科目について、内容およびその指導方法、学生の到達度（個別到達目標の到達状況）を記述する



ご清聴ありがとうございました。



報告後のディスカッションでは、自分たちの育てた学生が、卒業後どのような力を発揮し地域で活躍しているのか、とFD企画者研修で問われたときに、国家試験合格率や就職率でしか説明出来ず、具体的に地域で卒業生が活躍している姿が頭に浮かんで来なかったことに愕然としたことが、自大学の強みに気づききっかけであったことが語られた。その後、研修に参加した5つの大学の教員が一堂に会して話し合う機会があり、その中で、卒業生の活躍している姿が具体的に思い出され、語り合うことができたことについても、追加発言があった。また、研修参加前には、自大学の教員が、基礎・専門領域・公衆衛生と3つに分断されているように感じられ、これが問題だととらえていたが、具体的に地域で卒業生が活躍している姿を思い浮かべたとき、教員が分断されているなどと感じている場合ではなく、自分たちの育てた学生が、卒業してどのような力を発揮し地域で活躍しているのかを、教員間でもっと共有していけばよい、と感じられ、このような振り返りに、CQIモデル Ver.1は有用である、との意見が出された。

さらに、看護職は、妊娠中の母親の支援を通して、胎児の時代から地域の人々の健康を支える支援をする専門職であり、CQIモデル Ver.1 図1は、地域社会の中で、看護職が自らかかわった子供たちが、成長し、看護系大学に入学し、次世代の地域の人々の健康を支える支援者になる、という循環も表わしており、臨床の現場、地域の現場と、教育の現場がつながることで、命のバトンをつないで生きる看護職の姿が、明確になる、との見解も出された。

以上の報告とディスカッションを通して、看護系大学は、地域包括ケア時代において、人々のLife（生命・生活・人生）をつなぐ健康拠点になることができる、という可能性を実感することができた。

自大学の強みや使命を活かす CQI

—自大学をとらえなおす・CQI へのエネルギーを得る

<グループワークの部>

10. 全日程参加者グループ別名簿

1G(5名) ファシリテータ:吉本照子 場所:けやき会館3F レセプションホール

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
公	愛知県立大学	看護学部看護学科	講師	愛知県	1995	賀沢 弥貴
国	九州大学	医学部保健学科 看護学専攻	准教授	福岡県	2002	寺岡 佐和
国	高知大学	医学部看護学科	准教授	高知県	1998	関屋 伸子
私	埼玉医科大学	保健医療学部看護学科	教授	埼玉県	2006	大賀 淳子
私	天理医療大学	医療学部看護学科	教授	奈良県	2012	林 みよ子

2G(6名) ファシリテータ:野地有子 場所:けやき会館3F 小会議室

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
公	高知県立大学	看護学部看護学科	教授	高知県	1952	瓜生 浩子
国	香川大学	医学部看護学科	教授	香川県	1996	前川 泰子
私	修文大学	看護学部看護学科	准教授	愛知県	2016	春田 佳代
私	東都医療大学	幕張ヒューマンケア学部看護学科	教授	千葉県	2018	内宮 律代
私	姫路大学	看護学部看護学科	教授	兵庫県	2007	福川 京子
公	札幌市立大学	看護学部	教授	北海道	2006	松浦 和代

3G(5名) ファシリテータ:諏訪さゆり 場所:けやき会館3F 会議室4

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
公	兵庫県立大学	看護学部看護学科	准教授	兵庫県	1993	船越 明子
国	宮崎大学	医学部看護学科	教授	宮崎県	2001	末次 典恵
私	淑徳大学	看護栄養学部看護学科	准教授	千葉県	2007	佐佐木 智絵
私	茨城キリスト教大学	看護学部看護学科	准教授	茨城県	2004	松澤 明美
私	甲南女子大学	看護リハビリテーション学部看護学科	講師	兵庫県	2007	山居 輝美

4G(5名) ファシリテータ:谷本真理子 場所:けやき会館2F 会議室3

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
公	愛媛県立医療技術大学	保健科学部看護学科	准教授	愛媛県	2004	岡田 ルリ子
国	秋田大学	大学院医学系研究科保健学専攻	講師	秋田県	2002	永田 美奈加
私	上武大学	看護学部看護学科	准教授	群馬県	2004	片貝 智恵
私	了徳寺大学	健康科学部看護学科	教授	千葉県	2011	眞鍋 知子
私	豊橋創造大学	保健医療学部看護学科	講師	愛知県	2009	五十嵐 慎治

5G(5名) ファシリテータ:吉田澄恵 場所:けやき会館2F 会議室2

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
公	山形県立保健医療大学	保健医療学部看護学科	講師	山形県	2000	山田 香
国	山口大学	医学部保健学科 看護学専攻	教授	山口県	2000	伊東 美佐江
私	国際医療福祉大学	保健医療学部看護学科	准教授	栃木県	1995	入江 浩子
私	京都看護大学	看護学部看護学科	講師	京都府	2014	田村 葉子
私	産業医科大学	産業保健学部看護学科	教授	福岡県	1996	辻 慶子

6G(5名) ファシリテータ:錢 淑君 場所:けやき会館2F 会議室1

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
公	大分県立看護科学大学	看護学部看護学科	教授	大分県	1998	福田 広美
国	島根大学	医学部看護学科	准教授	島根県	1999	加藤 真紀
私	日本赤十字豊田看護大学	看護学部看護学科	准教授	愛知県	2004	原田 真澄
私	東京医療保健大学	千葉看護学部看護学科	教授	千葉県	2018	小黑 道子
私	群馬パース大学	保健科学部看護学科	准教授	群馬県	2005	中島 久美子

7G(5名) ファシリテータ:田中裕二 場所:アカデミックリンクセンター1F101・ひかり

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
国	三重大学	大学院医学系研究科看護学専攻	准教授	三重県	1997	井村 香積
公	宮城大学	看護学群看護学類	准教授	宮城県	1997	出貝 裕子
私	愛知医科大学	看護学部看護学科	教授	愛知県	2000	若杉 里実
私	新潟青陵大学	看護学部看護学科	教授	新潟県	2000	中根 薫
私	新潟青陵大学	看護学部看護学科	准教授	新潟県	2000	内藤 守

8G(5名) ファシリテータ:飯野理恵 場所:アカデミックリンクセンター1F102・まなび

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
公	名古屋市立大学	看護学部看護学科	准教授	愛知県	1999	尾崎 伊都子
私	日本赤十字秋田看護大学	看護学部看護学科	教授	秋田県	2009	新田 純子
公	福井県立大学	看護福祉学部看護学科	教授	福井県	1999	笠井 恭子
国	佐賀大学	医学部看護学科	教授	佐賀県	1993	田淵 康子
私	帝京科学大学	医療科学部看護学科	教授	東京都	2012	大西 奈保子

9G(6名) ファシリテータ:和住淑子・湯本晶代 場所:アカデミックリンクセンター3F 303・きわみ

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
公	岐阜県立看護大学	看護学部看護学科	准教授	岐阜県	2000	星野 純子
公	横浜市立大学	医学部看護学科	教授	神奈川県	2005	佐藤 政枝
国	旭川医科大学	医学部看護学科	准教授	北海道	1996	一條 明美
私	福岡看護大学	看護学部看護学科	教授	福岡県	2017	青木 久恵
私	湘南医療大学	保健医療学部看護学科	准教授	神奈川県	2015	澤井 美奈子
私	東京医療保健大学	医療保健学部看護学科	教授	東京都	2005	末永 由理

10G(6名) ファシリテータ:黒田久美子・稲垣朱美 場所:教育学部1号館2階・1216小会議室

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
国	岐阜大学	医学部看護学科	教授	岐阜県	2000	井關 敦子
公	島根県立大学	看護栄養学部看護学科	教授	島根県	2012	三瓶 まり
私	大阪医科大学	看護学部看護学科	准教授	大阪府	2010	土肥 美子
私	純真学園大学	保健医療学部看護学科	教授	福岡県	2011	西村 由紀子
私	自治医科大学	看護学部看護学科	教授	栃木県	2002	永井 優子
私	聖泉大学	看護学部看護学科	講師	滋賀県	2011	中島 真由美

11G(4名) ファシリテータ:斉藤しのぶ 場所:教育学部1号館2階・1213合同ゼミ室4

国公私別	大学名	所属	職名	大学所在地	開設年度	氏名
公	三重県立看護大学	看護学部看護学科	教授	三重県	1997	白石 葉子
公	和歌山県立医科大学	保健看護学部保健看護学科	教授	和歌山県	2004	岩村 龍子
国	浜松医科大学	医学部看護学科	教授	静岡県	1995	佐藤 直美
私	摂南大学	看護学部看護学科	准教授	大阪府	2012	中山 由美

1 1. 看護学教育 CQI モデル Ver. 1 を用いたワークの進め方

I. 看護学教育 CQI モデル開発の目的

本モデルは、各看護系大学の教員が、自律的な CQI に取り組むことを促進するために開発した。

図 1. 看護系大学教員の自己の立ち位置を説明する構造図

図 2. CQI に向かう看護系大学教員の思考の方向性をあらわす図

今後開発予定. 看護系大学教員の CQI の戦略活動を説明する図

II. 看護学教育 CQI モデル Ver. 1 の活用方法

図 1 は、多面的な自大学の現状分析に役立つ。図 2 は、現状分析の結果に至る『プロセス』の振り返りを促すことによって、より深い現状分析、自大学のありたい姿や必要な CQI について思考を深めることに役立つ。

III. スケジュール

<第 1 日目 10 月 29 日 (月) >

13:30~14:00 オリエンテーション、グループの部屋へ移動

14:00~14:30 <ワーク A> (30 分)

14:30~17:00 1 大学ずつの事例で<ワーク B>と<ワーク C>をセットにしてすすめる
(150 分) (17:15~交流会 けやき会館内コルザ)

<第 2 日目 10 月 30 日 (火) >

9:30~12:00 <ワーク B>・<ワーク C>の続き (150 分)

12:00~13:00 昼食・休憩 (60 分)

13:00~14:30 <ワーク D> (90 分)

14:40~15:40 全体討議・まとめ (60 分)

・「自大学のとらえなおし」、「CQI へのエネルギーを得る」に関する全体討議

・<ワーク D>の共有をし、さらに解決に向けてのヒントを得る全体討議

・まとめ

15:40~16:00 閉講式

IV. ワークの成果

各自がワークで経験し、気づき考えたことがワークの成果となる。ワークシートの提出や全グループの発表はなく、全体討議での活発な意見交換を通して、経験の共有と深まりを期待する。

V. ワーク内容

<ワーク A：自大学・地域・社会全体の現状を俯瞰する> (個人)

①図 1 を参照し、あらためて自大学、自己の立ち位置を俯瞰的に考える。

②ワークシートに自大学の現状を示す客観的事実を記載し、現状理解を深める。

③自大学・地域・社会全体の関係性、自身が気になっていることとの関係性を記述する。

ワーク A の留意ポイント!

・ワークシートの 1) ~ 3) は、どこから記述してもよいです。

・時間に限りがありますので、十分に記述できなくても 30 分で終わりにしてください。

<ワークB：自大学のストーリーを語り、相互にフィードバックする>

- ①自大学の現状やその現状にいたるプロセスを振り返る。
図2①、②のように自大学の現状やその現状にいたるプロセスを振りかえり、自大学・地域・社会全体の関係性、自身が気になっていることとの関係性をストーリーとして準備する。
- ②自大学のストーリーを語る
グループメンバーに自大学のストーリーを語る。
- ③グループメンバーからフィードバックを受ける
他大学のグループメンバーは、疑問な点、自分ととらえ方の違う点などについて率直にフィードバックする。
- ④さらに新たな気づきを得る

<ワークC：学生・教員・自大学・地域のありたい姿の実現に向け、第一歩を踏み出す>

- ①これまでのプロセスを経て、見えてきた学生・教員・自大学・地域のありたい姿を言葉で記述する。
- ②見えてきたありたい姿に向かって、今何ができそうか、何をしてみたいか、なるべく具体的にアイデアを出してみる。

ワークB・Cの留意ポイント！

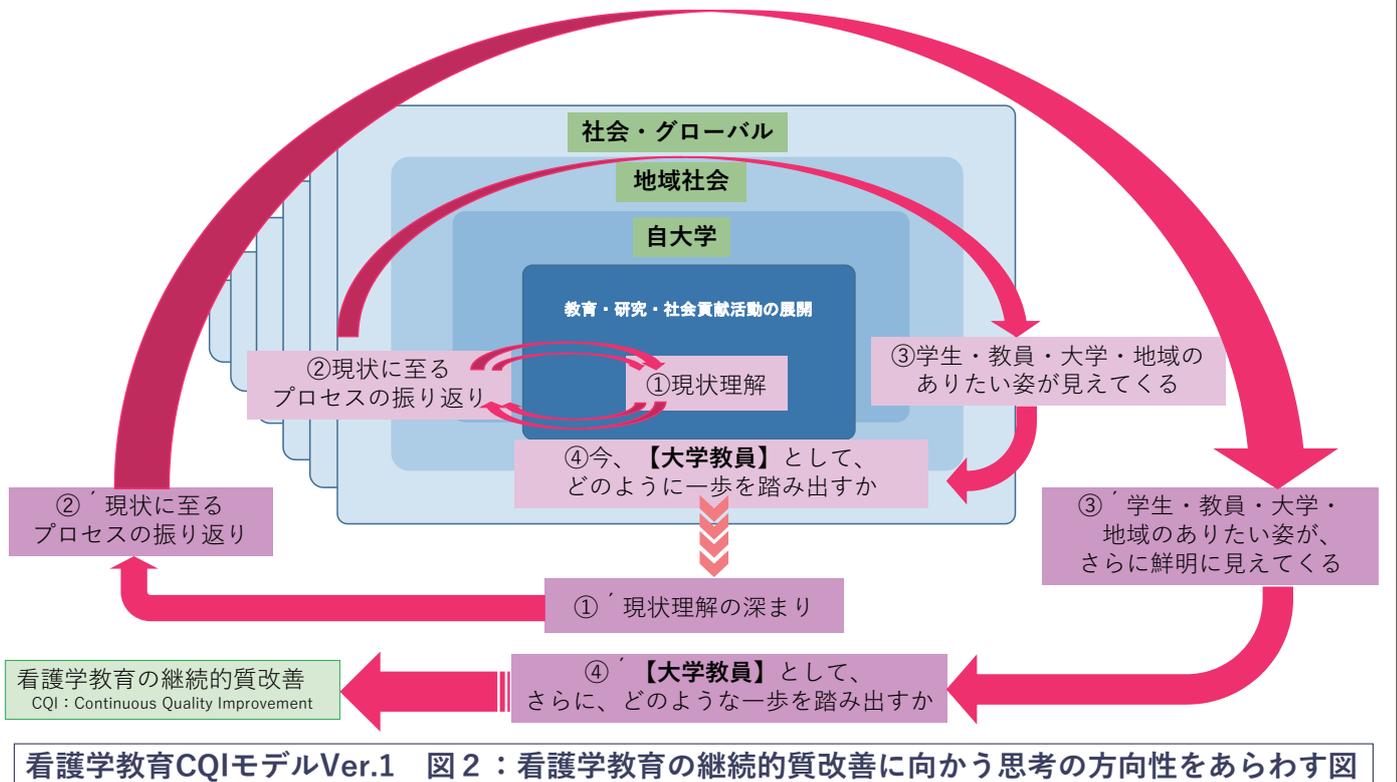
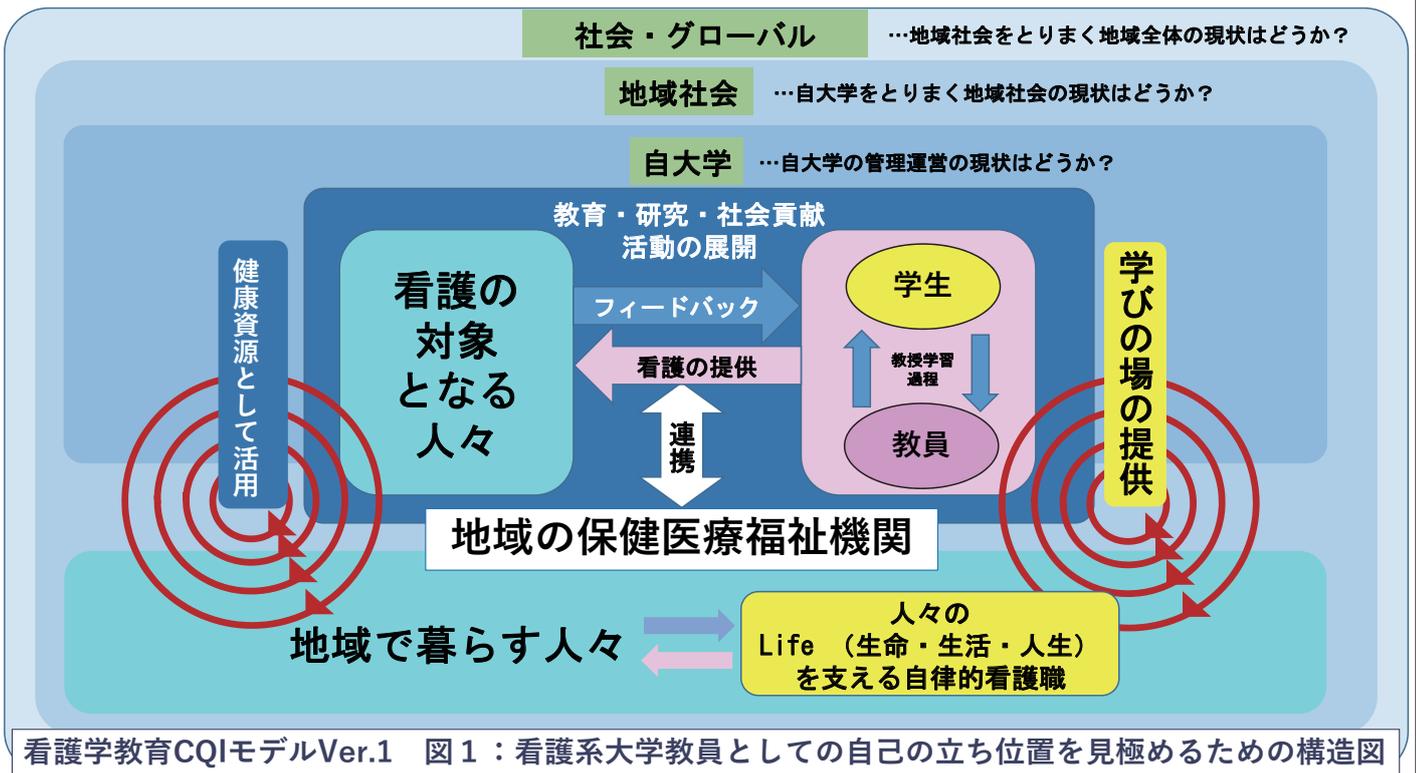
- ・<ワークB>と<ワークC>で実施することは、1大学ずつの語り、それに対するフィードバック、さらにフィードバックへの返答です。これは図2の①と②のプロセス、③のありたい姿を考えることにあたります。
- ・「ストーリー」＝「物語」は、単独の言葉だけではあらわせない事態のつながりを表現してくれるものです。時間の経過の中で出来事を説明したり、さまざまな登場人物のお互いの位置関係を示し、空間的広がりの中で事態を理解することが可能となります。
- ・<ワークB>と<ワークC>をすすめる際、ワークシートB、Cは、一つずつ欄の記述をすすめるのではなく、その都度、必要な内容を書き留めておくノートやメモとして自由に使ってください。自大学の語りの時だけでなく、随時、気づきを追記していきましょう。
- ・このワークのポイントは『相互支援』です。異なる背景の大学間、大学内の立場も異なるメンバー間の相違から、相互に学び、相互支援することがねらいです。
- ・質問や意見の伝え方、時間の均等な使い方、プライバシーの保護や守秘義務に配慮してワークをすすめてください。

<ワークD：自大学でCQIを推進する上で必要なこと・課題>

- ① 自大学でCQIを推進する上で必要なこと・課題についてあげ、グループでその解決に向けた戦略を考える

VI. ファシリテーターの役割

ファシリテーターは、主に、時間管理、すすめ方に困った際の相談役となり、グループを支援する。



12. ワークシート (A~D)

看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement :CQI) のためのワークシート

A

所属大学名 _____ 職位 _____ 氏名 _____

ワークシート A : 自大学・地域・社会全体の現状を俯瞰する

1) 自大学の現状について、現在気になっていることを以下の視点から振り返り、自由にメモしてみましょう。

- 視点1 : 学生の現状はどうか?
- 視点2 : 教員の現状はどうか?
- 視点3 : 教育・研究・社会貢献活動の現状はどうか?
- 視点4 : 自大学の管理・運営の現状はどうか?
- 視点5 : 自大学をとりまく地域社会の現状はどうか?
- 視点6 : 地域社会をとりまく社会全体 (含グローバル) の現状はどうか?

2) 図1を見ながら、1) でメモした気になっていることは、図1のどこに位置するのかを考え、図中に○印をつけてみましょう。

3) ご自身が気になっていることに関連のありそうな事実を、できるだけ多面的に集めてみましょう。

関連のありそうな事実 (メモ)	記入例
【自大学の沿革、設立の理念】	<ul style="list-style-type: none"> ・設置主体は学校法人 (私立大学) ・地元代々の医師一族が、地域の人々の医療を支える人材を輩出することを理念とし、地域の期待もあり開学した
【学生の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・なんとか定員充足しているが、合格者の学力格差が大きい ・授業についていけない学生がおり、個別学修支援ニーズが多い ・全員を国家試験に合格させるのが大変な状況
【教員の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・地方の新設看護大学なので教員がなかなか集まらず、教員確保に難渋している ・年齢も経験もさまざま
【教育・研究・社会貢献活動の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・学部教育だけで手いっぱいであり、研究・社会貢献活動まで手がまわらない ・大学院開設は開学時には想定していたが、懸案のまま保留となっている
【自大学の管理・運営の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・医師である理事長のトップダウンで物事が決まる
【自大学をとりまく地域社会の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・基幹産業は農業で、人口流出が激しい ・大学には地域創生を期待されている ・附属病院はないが、地域の医療施設とは良好な関係にある
【地域社会をとりまく社会全体 (含グローバル) の現状】	<ul style="list-style-type: none"> ・社会保障費の増大が国家予算を圧迫 ・地域包括ケアシステムの構築が進んでいる ・病床機能分化が進んでいる ・大学進学率の上昇

4) ご自身が気になっていることと、それをとりまく自大学・地域・社会全体は、どのようにつながりあっているのでしょうか? その関連性を記述してみてください。(メモや箇条書きでよいです)

看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement :CQI) のためのワークシート
所属大学名 _____ 職位 _____ 氏名 _____

B

ワークシート B：自身の気になっていることとそれをとりまく自大学・地域・社会全体の関係性をストーリーとして語る

1) 図2の①、②のように、現状とその現状に至るプロセスを振り返りながら、自身の気になっていることとそれをとりまく自大学・地域・社会全体の関係性をストーリーとしてグループメンバーに説明してみてください。必要なら、以下に、説明用のメモを作りましょう。

2) グループメンバーから受けたフィードバックの内容を以下に記述してみましょう。

3) 新たに気づいたことがあれば、以下にメモをしてください。

看護学教育の継続的質改善 (Continuous Quality Improvement :CQI) のためのワークシート
所属大学名 _____ 職位 _____ 氏名 _____

C

ワークシートC：学生・教員・自大学・地域のありたい姿の実現に向け、第一歩を踏み出す

1) これまでのプロセスを経て見えてきた③学生・教員・自大学・地域のありたい姿を、ご自身の言葉で記述してみてください。

☆思考のヒント☆ 個人レベル、専門領域レベル、学部・学科レベル、大学レベルなど、どのレベルで考え始めてもよい

☆思考のヒント☆

- ・ 図1の登場人物の各々について、ありたい姿を考えてみる（**ありたい姿は、自分本位や、机上の理想論ではなく、現実に即し未来に向かう姿として考えてみる**）
- ・ 以下のような問いかけで、図1の登場人物の各々についてありたい姿を考え、短いフレーズや単語で表現してみる
 - 例) 「人々のLifeを支える自律的看護職」、「地域で暮らす人々」とはどのような人か
 - 例) そのためにはどのような「学びの場」があったらよいか、どのような「学生」であったらよいか、どのような「教員」だったらよいか
 - 例) 「地域の保健医療福祉機関」のありたい姿とは
 - 例) 学生が実習で看護を提供する「看護の対象となる人々」とはどのような人であったらよいか

2) 見えてきたありたい姿に向かって、今、何ができそうか、何をしてみたいか、なるべく具体的にアイデアを出してしてみましょう。

☆思考のヒント☆ 協力者を具体的にイメージしてみる 脅威はチャンスにならないか？ 弱みは強みにならないか？

看護学教育の継続的質改善（Continuous Quality Improvement :CQI）のためのワークシート



所属大学名 _____ 職位 _____ 氏名 _____

ワークシートD：自大学でCQIを推進する上で必要なこと・課題

1) 見えてきたありがたい姿に向かい、CQIをすすめる上で、自大学で必要になること・課題はありますか？

2) その解決に向けて、どのような戦略をとったらよいでしょうか。グループでディスカッションをしてみましょう。

13. 全体討議・まとめ

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

和住 淑子

グループワークの部では、参加者が11のグループに分かれ、CQIモデル Ver.1とワークシートを用いて、自大学をとらえなおすワークを行った。グループワーク後、それぞれの参加者が自大学をどのようにとらえなおし、CQIのエネルギーを得たのかについて、参加者相互で共有し、さらなるCQIのエネルギーとするため、全体討議・まとめを行った。全体討議・まとめで共有された主な内容は以下のとおりである。

- 一般的な評価項目に基づく評価を実施する中で、その数値にとらわれ、評価疲れを起こしている自分達の現状を客観視できた。しかも、その評価の視点は、教員から見た視点でしかなく、学生の生の声など、教育の対象である学生の視点からみた評価ではないことに気づかされた。組織の存続という点では、一般的な評価項目に基づく評価をきちんとして補助金を得ていく活動も必要であるが、それを基盤にしながらも、学生との対話を通して見えてきた本当の教育の質の部分をもとに捉える必要があると感じ、新たな評価のあり方の着想を得た。
- 国公立大学それぞれに課題があり、悩みがあることを知った。自大学は、比較的コンパクトな大学なので、そのコンパクト性を生かしたらよいのでは、というヒントを得て、自大学の教員間の関係性をとらえなおしてみたところ、教員間のまとまりが良く、コミュニケーションもしっかり取れている、という自大学の強みを発見できた。
一方、学生に対する教育という面では、教員が手を掛け過ぎ、それがかえって他学部教員や実習病院職員との協働を妨げたり、学生が本来持っている力の発揮を妨げている面にも気づくことができた。学生の教育目標を一致させていくような話し合いを重ねることが、CQIの第一歩かと思う。
- 自大学は少子高齢多死社会の先進地域にあり、その課題に対応できる人材を育成することが求められている。そのような人材を育成しているかをきちんと評価する、という視点で、自大学の教育活動をとらえなおしたとき、それぞれの教員は頑張っているが、それが成果につながっていないと感じた。そのことを、教員自身が自覚できるようにするために、アセスメントポリシーを考え、それを図式化して、共有化していこうと思っている。一般的な評価は一生懸命しているが、自大学の強みが何なのかという視点で戦略を考え、評価する必要性に、グループワークを通して気づくことができた。

○自大学のありようを、「弱さ」「問題」ではなく、「強み」「課題」として明るく話しながら、ポジティブシンキングができたことが、本グループワークの最大の成果かと思う。新設校ですら、5～6年の間に世代交代が起き、教授陣を中心に、がらりと構成員が変わる可能性がある。ほんの数年の間に建学の精神が失われ、立て直しに苦勞している大学の事例が身に染みて伝わってきた。教員組織を強化していくためには、教員一人一人が過ごしてきた年月の中で培ったキャリアが非常に重要であり、その人固有の成長曲線の特徴に見合ったキャリア支援が、CQIの課題であるとわかった。

○自大学は、地方の田舎の本当に小さい田んぼの中の大学で、どこに行くにも遠く、教員が欠員になってもなかなか人が来ない、といった本当にネガティブな見方でワークを始めたが、地域の伝統や文化を大事にしながら学生を育てている、という他大学の状況を聞き、地域の伝統や文化、地域から求められる大学の役割に目が開かれた。

3世代同居率全国1位、3人たどれば親戚といわれるような濃厚なコミュニティの中で、祖父母にとって、孫が入ってほしい身近な大学であることから、模擬患者や、実習などで患者さんたちが本当に協力的に学生を受け入れてくれるような、地域の人々から愛されている大学だということに気づかされた。グループワークを通し、地域に密着したナース、地域住民から愛されるナースを育成していたという実績に改めて気づき、建学の理念や3Pもそのようになっていたのだと改めて腑に落ちた。

しかし、教員たちは、このような成果を必ずしも自覚していないこともはっきりした。そこで、今後は、地域における大学の役割、地域住民のお茶飲み場としての大学、これを地域で共有していくことをビジョンとして共有し、一步を踏み出したいと思う。また、小規模病院にも実習に出掛けており、そこで触発される学生たちもたくさんいることから、地元密着型のケアの価値を見直すという点でも、何かしたいと思っている。世界最先端の高齢化率の地域でどのようなケアが行われているのかを、全国的にも世界的にも発信する価値の自覚というエネルギーを得ることができた。

○県内で13番目に開学した新設大学であり、地域の実習施設から必ずしも実習生の受入れを歓迎されない状況にあることから、自身のこれまでの努力は、大学の目指す理念の実現だけではなく、地域の実習施設がどのような人材を欲しいと思っているか、実習受入れの条件は何かということ、一生懸命考えながら、大学の社会貢献と地域のニーズの調和を図っていたことにあると、グループワークで気づいた。

新設大学の教員組織の中には、看護系大学での教育経験のない教授もいることから、FDでは、大学の理念だけではなく、地域では、どのような条件の大学が歓迎されて、どのような条件の大学が歓迎されないかということも含めて、大学の社会貢献の姿を教員間で共有できるような内容が必要だとわかった。

○最終的に、グループワークを通して CQI のエネルギーが増えたわけではないが、私たち教員のエネルギーがなぜこんなにも消耗しているのか、今あるエネルギーをどう使っていったらよいかについては、よく分かった。

私たち教員が疲弊しているのは、型がかなり決まってしまうと、型通りしなければならないという思い込みがあり、学生も変わり、社会も変わっているのに、しなければならないことをひたすらやっているからなのだと気づいた。また、学生も課題をこなすことに精いっぱい、自ら学ぶことができないような教育課程になっているというところが見えてきた。良い型はそのままうまく使い、合わない型は、今の状況に合ったような形に柔軟に変えていけばよいのだと思う。教員仲間同士で、少し視点を変えながら、「こうやったら大丈夫だよ」と話をして、新しく変えていったり、運用の仕方を考えていけるような、そういう一歩が踏み出せると思っている。

○他大学の教員と率直に話し合うことのできるこのようなグループワークの場は、大変クリエイティブだと思う。また、職位の異なる教員と話すことは、自大学をとらえなおす、というよりも、忘れてしまっていた、かつて自分がその職位にあったときのことを思い出す、という効果があると思う。

方法が目的化してしまうと、疲弊してしまうが、このようなクリエイティブな場で改めて自大学の目的や目標をとらえなおして、どのようにしたら自分たちがやれるのかと考えることが大切であると気づいた。その際に、他大学の教員も、皆苦勞して頑張っていることが分かるだけで、大変大きなエネルギーをもらうことができた。

○教員間で同じ方向を向くことが非常に大事であると気づいた。

また、特に、助教は他の大学の教員との交流の機会がない世代だと思うので、助教など、少し若い世代の教員にとっても、今回のグループワークのような機会が持てるとよいと思う。

○日頃、大学がその地域にある意味、そこに存続していく意義を忘れがちになるが、改めて原点に戻り、大学が本当にやっぱ社会に貢献していくためにはどうあるべきなのかを考える非常に貴重な機会になった。

○教員の不満とは、こうしたい、ああしたい、なのにうまくいかない、ということなので、教育改善に何かしらの関心があり、ありたい姿がある、ということなので、それをうまく使って、ポジティブなエネルギーに転換していくことが、CQI 活動なのではないかと思う。

また、学生にも教員にもさまざまな人がおり、多様性はいろいろな力の集合であるのとらえると、一つ一つの力を発揮させるような工夫をしていけば大きな CQI 活動の力にな

と思う。

今回のグループワークで使用した **CQI モデル Ver.1** とワークシートは、個々の看護系大学教員が自己の立ち位置を多面的に見極めることができるようになることを期待して作成した。実際にこれらを活用したグループワークによって、参加者は、自己の立ち位置を多面的に見極め、他大学の教員との意見交換によって **CQI** のエネルギーを得ていた。このことから、**CQI モデル Ver.1** とワークシートは有用であると思われる。

さらに、全体討議では、他大学の教員の語る他大学の状況との対比によって、自大学に対する見方が転換し、自己の立ち位置を多面的に見極め、**CQI** のエネルギーを得ることができたことが、繰り返し語られた。このことから、**CQI** 活動における大学教員同士の相互支援の場の必要性和意義を、改めて確認できた。

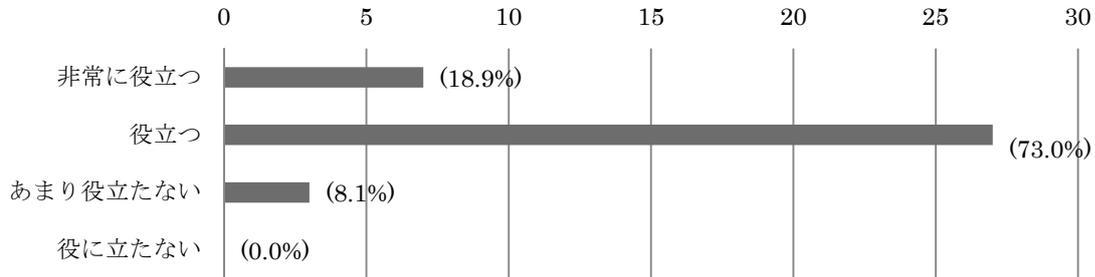
モデル図にも示したとおり、学生は、やがて「地域社会」で「人々の **Life** (生命・生活・人生)を支える自律的看護職」となり、「地域で暮らす人々」の健康を支援する役割を担う。看護系大学が 270 校を超える今、すべての看護系大学がそれぞれの置かれた場においてその力を発揮することにより、人々が健康に暮らす地域社会の実現に貢献できると思う。そのような社会の実現のために、当センターでは、看護系大学教員の相互支援の場づくりを推進していきたい。

14. ワークショップ評価

I. 講演と報告の部のみの参加者による評価

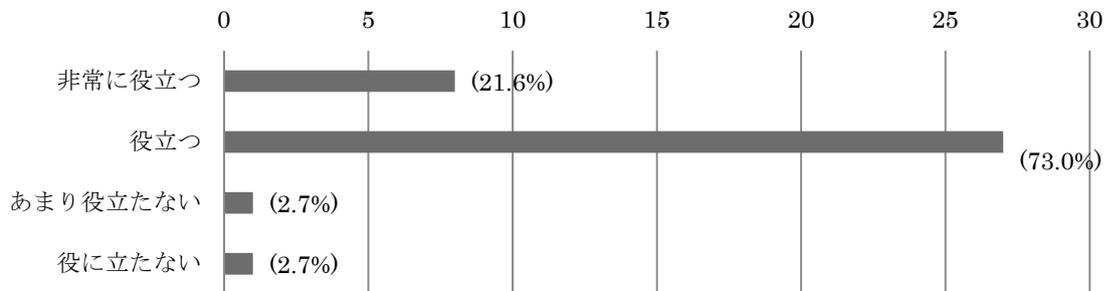
1. プログラムの評価

1) 報告「CQI モデル試案」は役に立ちましたか？ (N=37)



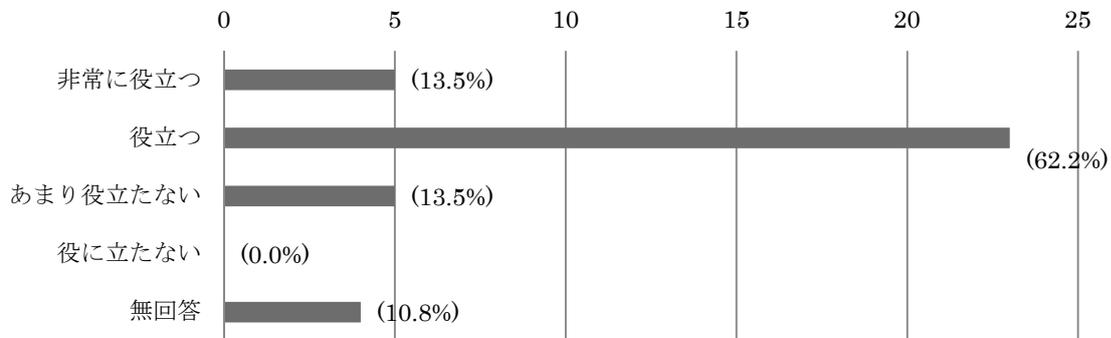
2) 文部科学省「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」は役に立ちましたか？

(N=37)



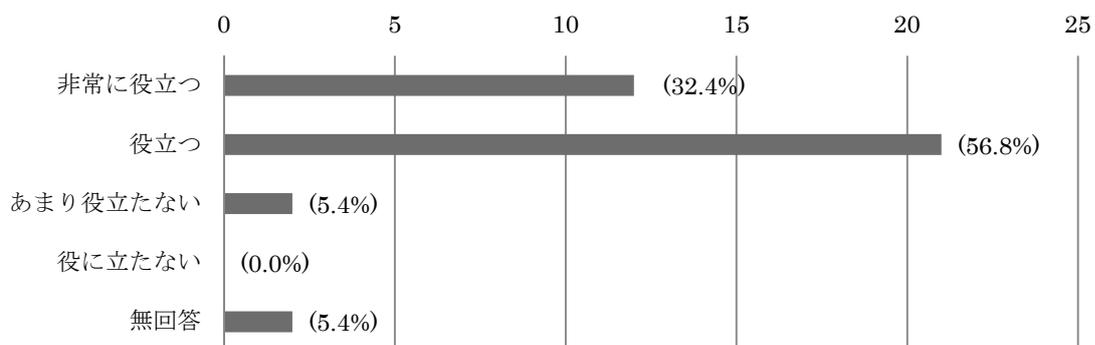
3) 報告「学部指針を CQI にどのように使うか」は役に立ちましたか？

(N=37)



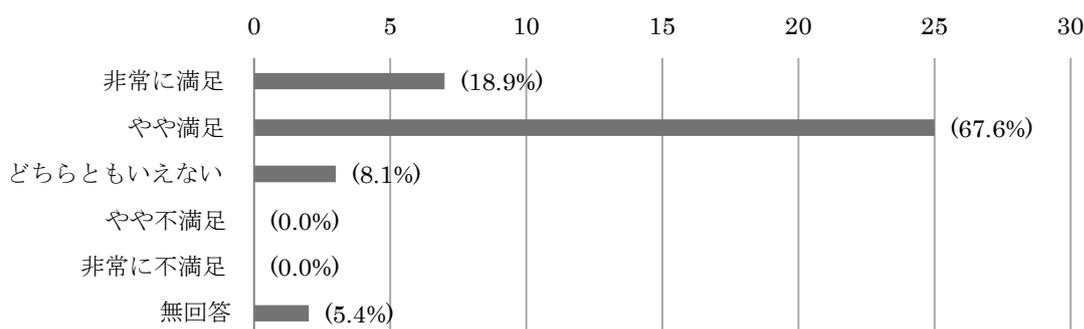
4) 報告「熊本保健科学大学による CQI 取り組み事例」は役に立ちましたか？

(N=37)



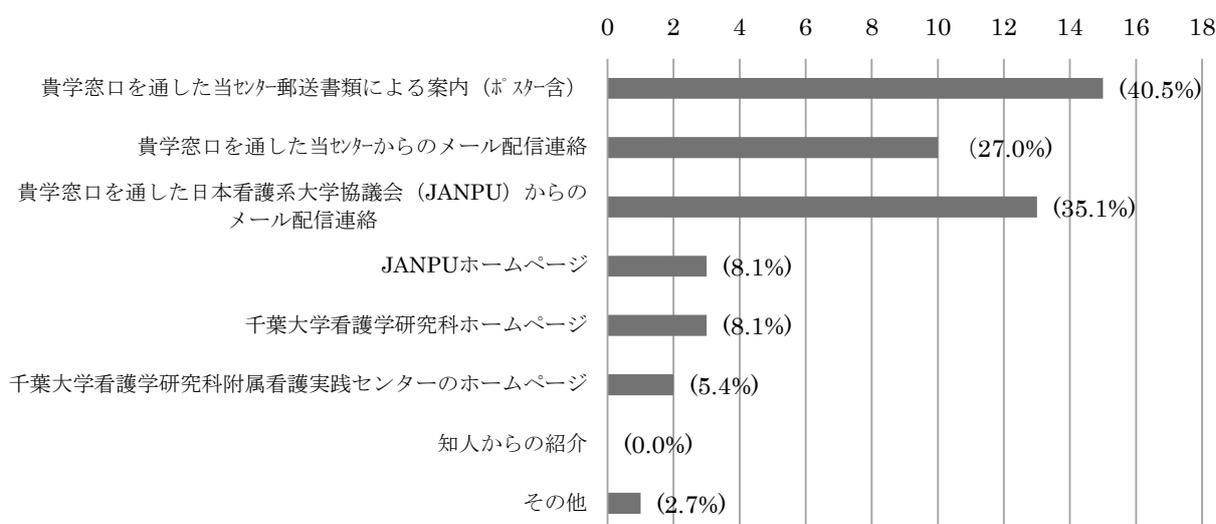
2. 全体の満足度はどの程度ですか？

(N=37)



3. 今回の企画は、どのようにして知りましたか？

(N=37, 複数回答)



4. お気づきの点や看護学教育共同利用拠点に今後、期待することをご記入下さい。

<感想>

- ・ CQIの開発に敬意を表したい。看護のゴールと看護教育を取り巻いている環境を念頭において、教育の在り方を検討しなければならないことを認識した。‘足りないものだけを気にしていませんか?’にはハッとしました。「やっていること」「できていること」は当たり前とスルーしないで要所でおさえないといけないと思った。
- ・ 有意義な時間であった。FD担当なので、活動の参考にしたいと考えている。
- ・ 初めて参加し、いろいろな学びが得られた。盛り沢山だったので資料をゆっくり見直して理解を深めたい。
- ・ 4月より専門学校から転職した。今ならばまだ自学の組織分析ができる時期だと思い、やる気が出てきた。もっと実践例が出される事を期待したい。
- ・ コア・カリキュラムの活用と CQI の推進とともに看護学教育の改革が伴わないと他職種と協働できないのではないかと考える。教育内容と合わせた教育方法の根本改革が必要だと考える。
- ・ 外部指針について、学術会議の分野別基準や JANPU のコンピテンシーなどについて触れなかったが、これは外部指針ではなく参照基準として捉えたためか？
- ・ 熊本保健科学大学の先生方のご発表にとっても力づけられた。
- ・ 途中までの参加となり残念だったが、CQI については概要を理解した。今後とも機会がある限

り、継続して学びたい。

- ・ 学内では、学生対応や委員会活動に追われ、あっという間に1日が過ぎ去ってしまう。教員一人一人は高い能力や深い学生への愛、教育への想いを持っていると感じるが、個人の力量にまかされていることが多く、今後のキャリアを考え始めたところだった。教育研究者として、組織内での役割を認識し、外部とのつながりを持って、学び続ける姿勢をもち続けたいと思った。
- ・ 学生をまとまりで捉えていると、学生の特性がみえなくなるのか。求める学生の姿は数値で良いのか。教員の対象者理解が私の理解と違うことがわかった。
- ・ CQIモデルが分かりにくい。全体的に説明が分かりにくい。

<今後期待することについて>

- ・ 看護系大学の教育の質向上のために様々な提案をしてほしい。
- ・ 複数大学事例をふまえた検討に期待したい。
- ・ 学生調査（アンケート・インタビュー）などを通じた学修成果の把握などについても検討して頂けると良いと感じた。

<運営等について>

- ・ 各プログラムの内容が濃い短い時間の中での実施なのでもう少し時間をかけて進行してもらえると深く考えることができると思った。
- ・ 前半部の質疑が無かったので、その時間をとって欲しいと思った。
- ・ 遠方からの参加では参加費以外の経費がかかる。また、参加人数に制限があるため参加希望者が全員参加できない。JANPUの講演会同様、Web視聴の検討をして欲しい。

5. 参加者の属性

(N=37)

項目		人 (%)
所属施設	国立大学(省庁含む)	8 (21.6)
	公立大学	3 (8.1)
	私立大学	26 (70.3)
職位	教授	23 (62.2)
	准教授・講師	9 (24.3)
	助教・助手	3 (8.1)
	その他	2 (5.4)

6. 参加動機・参加の経費

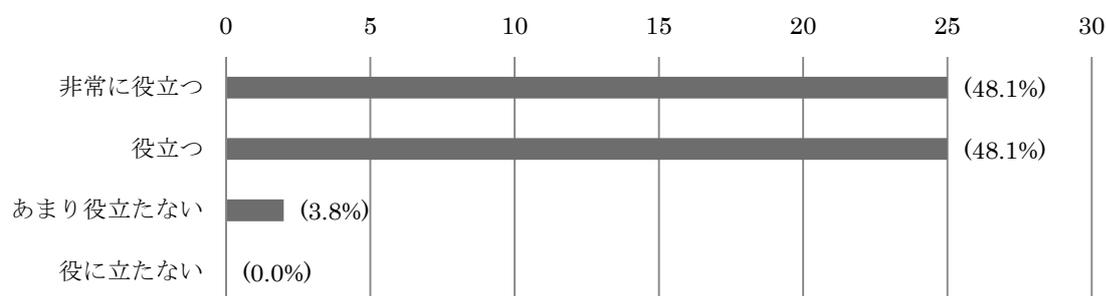
(N=37)

項目		人 (%)
参加動機 (複数回答)	今回のテーマに興味があったから	28 (75.7)
	上司に勧められたから	13 (35.1)
	その他	1 (2.7)
参加の経費	参加費・旅費ともに所属施設負担	23 (62.2)
	参加費・旅費のいずれかを所属施設負担	2 (5.4)
	その他	12 (32.4)

II. 全日程参加者による評価

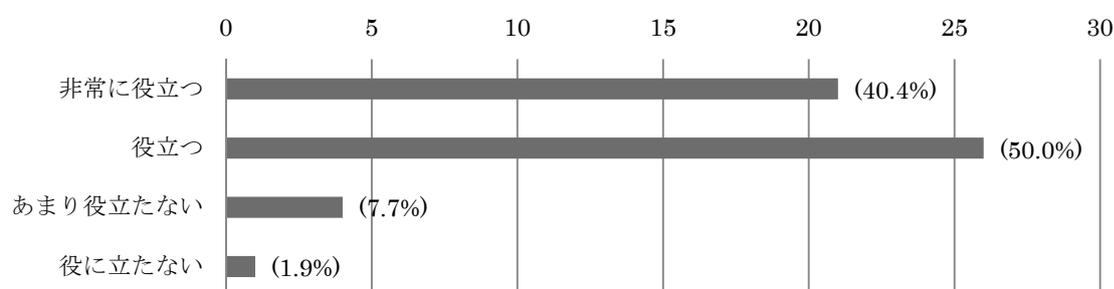
1. 「講演と報告の部」の評価

1) 報告「CQI モデル試案」は役に立ちましたか？ (N=52)



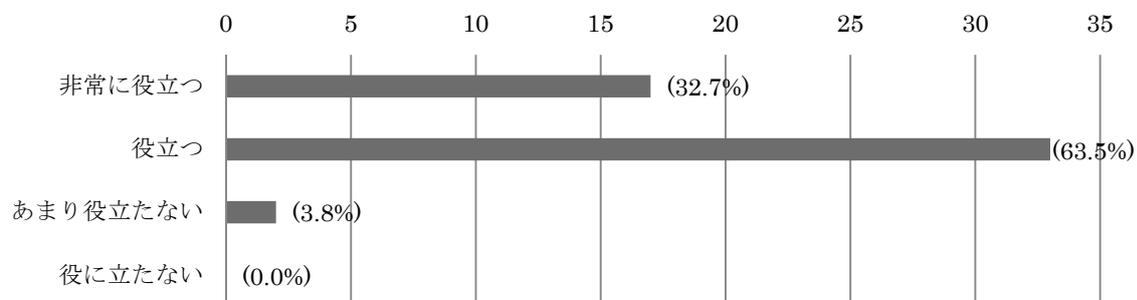
2) 文部科学省「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」は役に立ちましたか？

(N=52)

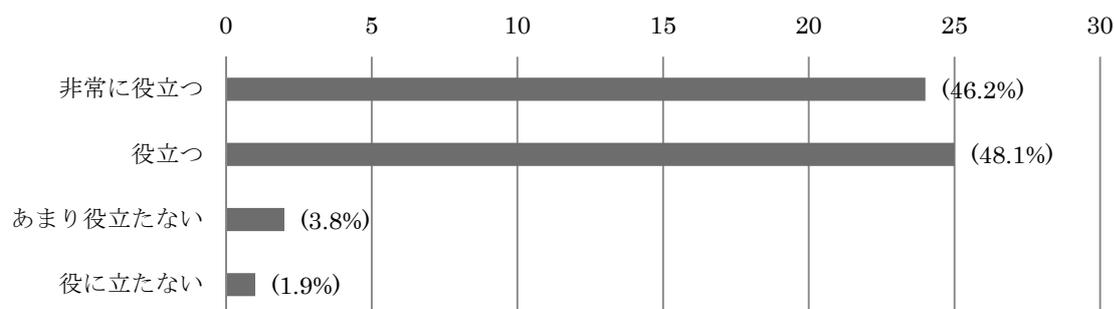


3) 報告「外部指針をCQIにどのように使うか」は役に立ちましたか？

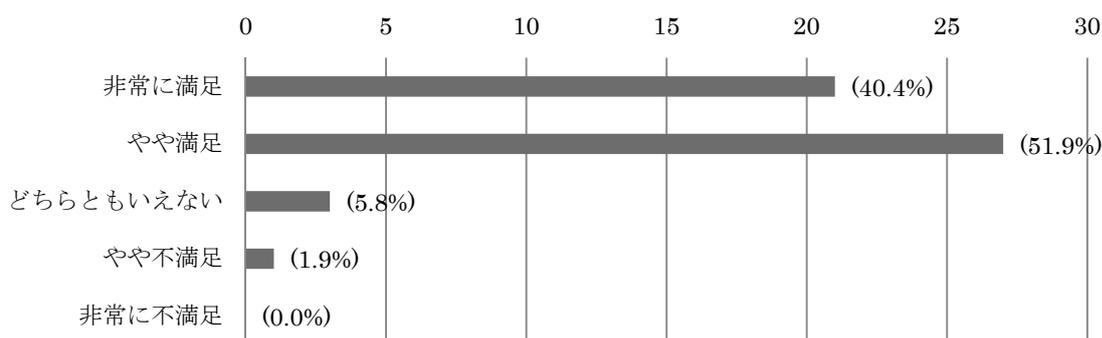
(N=52)



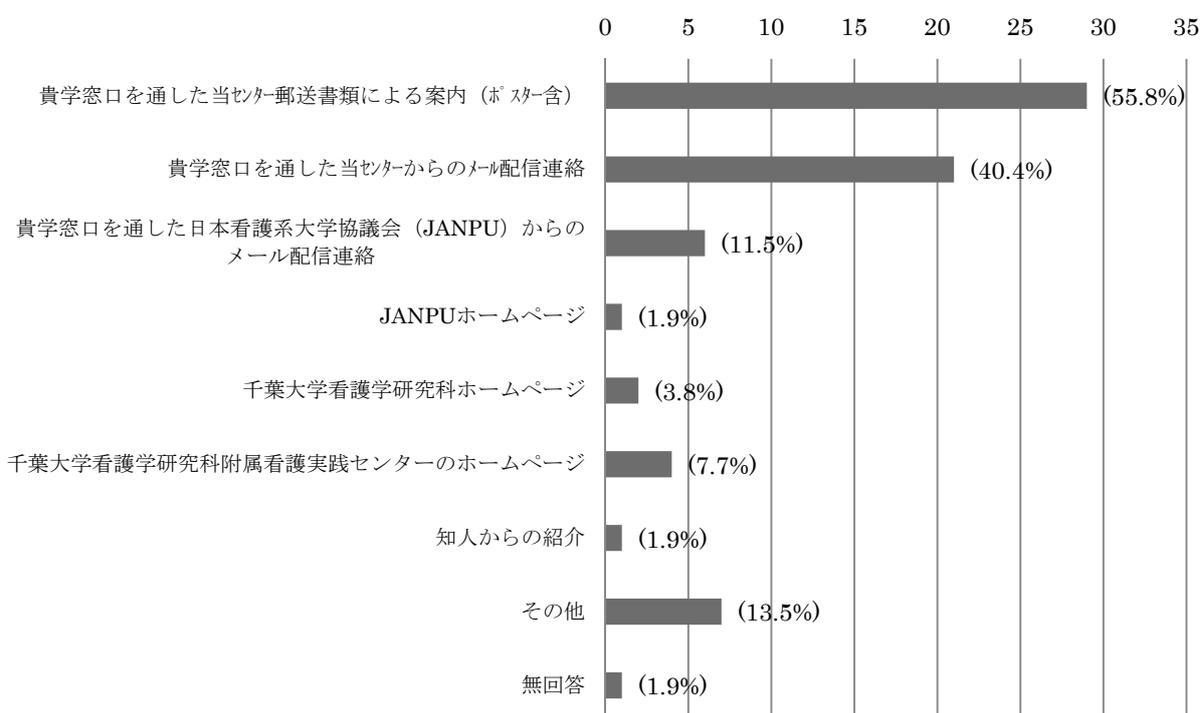
4) 報告「熊本保健科学大学によるCQI取り組み事例」は役に立ちましたか？ (N=52)



2. 「講演と報告の部」について、全体の満足度はどの程度ですか？ (N=52)



3. 今回の企画は、どのようにして知りましたか？ (N=52, 複数回答)



4. お気づきの点や看護学教育共同利用拠点に今後、期待することをご記入下さい。

<感想>

- ・ 今回自発的に参加したので、興味を持って楽しんで研修を受けることができた。
- ・ 外部指針が何なのか (誰がどのように作成したのか) が不明のまま説明が進んだのでわかりにくかった。
- ・ 文科省の方のスライド内容を詳細にしていただけるとありがたいと思った。
- ・ 「外部指針を CQI にどのように使うか」をもう少し詳しく説明して頂きたかった。
- ・ 2については、ほとんど何回かすでに聞いた内容だった。
- ・ CQI モデル試案は、個人的な動機でも使えるということだったが、組織的に使わないと効果的ではないのかもしれないと思ったので、個人ベースの活用はわけたほうがよいのではないかと思う。検討を期待したい。
- ・ 私学は大学そのもののミッションが明確なところもあれば、かなりアバウトなところもあるので、どこにいるのかもちがうのではないかと思う。

- ・ CQI モデル試案の報告は、必要なものではあったが内容は「当たり前」にきこえた。もっと CQI モデルについて具体的な説明をお願いしたい。
- ・ 取り組み事例の報告は、ワークショップと関連している部分があればよかった。

<今後期待することについて>

- ・ CQI モデル試案のバージョンアップ
- ・ 研究の成果を発信してほしい（されているとは思うが）。
- ・ 出張研修のプログラムを増やしていただくこと。
- ・ 参加の枠を広げてほしい（助教の会のような）。

<運営等について>

- ・ 1 日目午前中、途中で休憩を入れていただきたい。

5. 参加者の属性

(N=52)

項目		人 (%)
所属施設	国立大学(省庁含む)	10 (19.2)
	公立大学	13 (25.0)
	私立大学	27 (51.9)
	無回答	2 (3.8)
職位	教授	25 (48.1)
	准教授・講師	25 (48.1)
	無回答	2 (3.8)

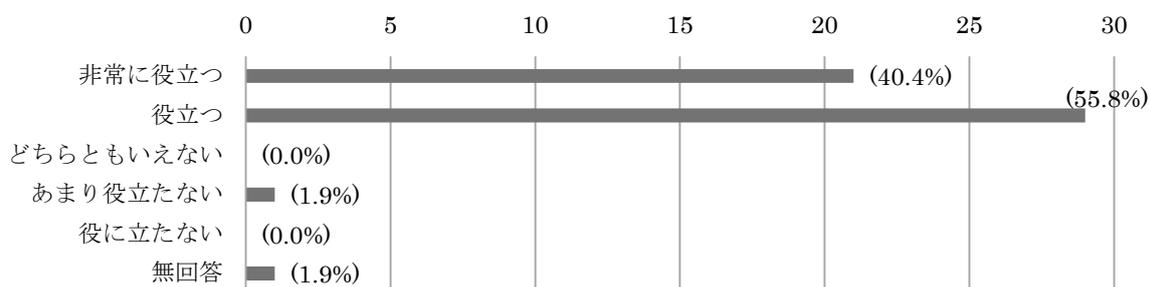
6. 参加動機・参加の経費

(N=52)

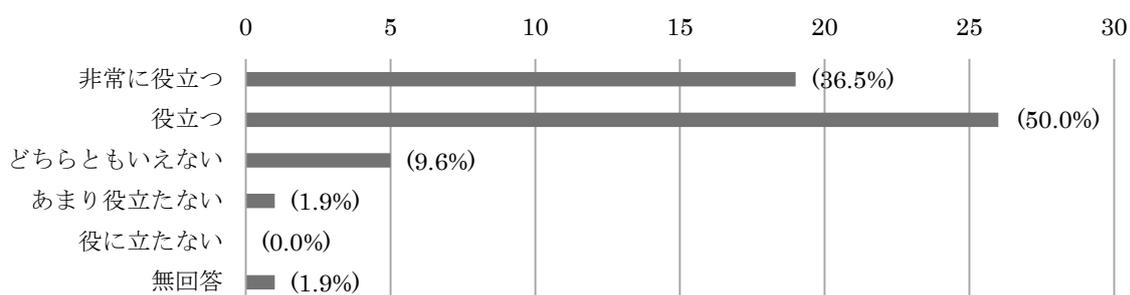
項目		人 (%)
参加動機 (複数回答)	今回のテーマに興味があったから	21 (40.4)
	上司に勧められたから	36 (69.2)
	その他	4 (7.7)
参加の経費	参加費・旅費ともに所属施設負担	48 (92.3)
	参加費・旅費のいずれかを所属施設負担	1 (1.9)
	その他	2 (3.8)
	無回答	1 (1.9)

7. ワークについての評価

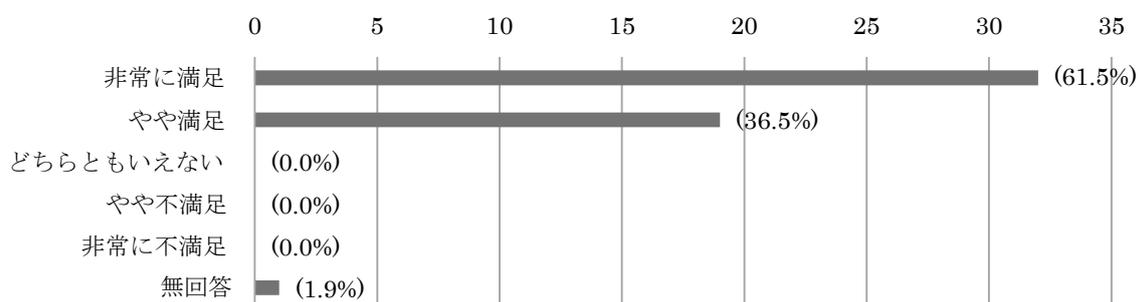
1) ワーク内容を通して自大学をとらえなおすことに役立ちましたか？ (N=52)



2) 今回のワークショップは、自大学でCQIを推進するうえで役立ちますか？ (N=52)



3) 今年度のワークショップの満足度はどの程度ですか？ (N=52)



8. ワークショップを通して学んだこと、考えたこと、感じたことを自由にご記入ください。

<感想>

- ・ 自大学の現在の事実を伝えていくことにより、自分の考えや思いが整理できたとともに、自大学のできていることを認め、見方を変えるヒントを得ることができた。
- ・ 自分の大学にも良いところがある。私が大学のことで考えていなかった点に気づけた。
- ・ 自大学の強み、弱みが分かって取り組みに示唆を得た。
- ・ 自分の大学の強みが改めて見えてきた。自大学のよさを発見することができた。
- ・ 普段仕事に追われ、自大学について考えることがなかったが、今回改めて捉えなおすことができた。
- ・ 大学のあり様から振り返ることが無かったので、現状がなぜ起きているのかを客観的に捉える事ができた。
- ・ 自学のミッションからの課題の明確化が出来、自分の役割からの解決の第1歩がふみだせるきっかけがわかった。

- ・ 図 1 を使いながら自大学の説明をすると普段意識していないことも考えるきっかけとなるため、自大学の見方を広げることができた。
- ・ 自大学では気づいていない見方があること、新たな発見も沢山あった。刺激を受けて、明日からのエネルギーを沢山もらった。
- ・ 自校の課題に気づくきっかけになった。他の大学の先生との交流により、様々なアイデアが出てきた。
- ・ 他大学の「現状」から、本学を客観的にみることができた。
- ・ 自学が外からどうみられているか、自分がどう見ているか、言葉にすることで根幹が何なのかみえた。教員がお互い何を考えて仕事をしているか、みえていなかった。共通の認識をもつ前段階として考えを発する場が必要なのではないか。
- ・ 他大学の先生方の話を聞いたり、意見をもらったりすることで、自分自身や自大学について客観的にみる視点を得た。
- ・ 他大学との比較を通して自大学の強み、立ち位置を考えることができた。
- ・ 他大学の現状を知る中で、自大学の在り方を見直す機会となり、活発な意見交換から自大学でも実践的に取り入れることができる方策に示唆を得られた。国公立私立様々な地域、開設年度の大学教員とのグループワークをとおして共通の問題点が共有できた。自大学の問題について解決のヒントをいただけたことも大きな収穫だった。
- ・ 他の大学の現状を聞いて、自大学のよさも感じることができた。
- ・ グループワークでシート A と図 1 を使うことで原因の関連性が明確になった。発表し他のメンバーから意見をもらうことで自大学の良さに気づき、解決方法のヒントとなった。
- ・ 「自学のとらえなおし」というよう、個人（自ら）の教育プロセスの見直しにつながった。“エネルギーを得る”というより解決プロセスや解決策を具体的に得ることができた。
- ・ 時間をかけてあらためてストーリーを組み立てたことで、まず自分（個人）ができること（取り組むことが）がみえた気がする。
- ・ ありのまま思っていることを活かして、ゆっくりととらえなおしができました。図 I を活用することで、現状を捉えなおすことがやりやすかったです。学際的な分析を行っていくよりありのまま語りながらディスカッションすることは有意義でした。
- ・ 日々雑務に追われる中で、2 日間自大学の分析を行えたことが良かった。
- ・ グループの構成がよかった（国公立、私立の教員構成・大学のある県が違う）。
- ・ 様々な大学の実情も理解できた。それぞれの状況の中でそれぞれが模索しながら努力していると思った。自分の CQI を考えたり思ったことを言葉にしたりすることで、自分のあるべき姿や夢の再確認ができた。
- ・ 程度に差はあるものの、共通する課題、悩みや困り事があることを改めて実感した。
- ・ 国立・公立・私立大学で捉える課題についてその特徴の違いなどよく分かった。それに対する対策については、共通する事も多くあるように感じた。
- ・ 他大学の状況がよくわかった（特にモデルを使うとわかりやすい）。
- ・ 多様な大学の現状が分かって良かったです。
- ・ 様々な立場や職位の方々と話し合うことができた。自分でも明確な考えが十分でないまま語りはじめても、ファシリテータからのアドバイスやメンバーの先生方の発言から自身で整理をするこ

とができたと思う。満足感・達成感があり、本音でディスカッションできたと思う。

- ・ 他大学の方と話す場があり、大変良かった（目的が同じということで盛り上がった）。グループワークで他の先生方からエネルギーをもらった。
- ・ 学外の先生方から沢山の具体的な助言を頂き、早速、本学で取り組んでみたい、と思った。
- ・ 今、FDとして、何をすべきかが見えてきたので早速取り組もうと思う（④～⑩の分析を委員で行う→分析の結果を実践する）。
- ・ FDの成功は、大上段に構えるよりも日常的に身近に取り組みやすい方法と内容を考えてみることはあると学んだ。
- ・ とらえ方、発想は常にソフトに。仲間をつくる。意見をもらう。
- ・ エネルギーをもらえた。
- ・ 大学といってもいろいろだし、新設かどうかではなく、いろいろな観点からの工夫や努力ということを共有してある意味責任をとらずに、使ってもらえればいいよ、という通常の文脈から離れたニュートラルな提案・提示がなされるのがとても安心していられると思った。
- ・ エネルギーが本当に得られるのかどうか、半信半疑だったが、語ること、助言をもらうことの相互作用の中で、小から大まで複数のアイデアが浮かんできた。あとは行動にうつすのみだと思う。
- ・ 強みを考えることの大切さ。自分をどう支えるか。大学が存続する意味や選ばれる大学になるためにどうするか考えなければならない。

<運営等について>

- ・ ワークシートを記入するにあたっての時間（AとBを書くための時間）がもう少しあればよかった。

9. 今年度のワークショップの企画・運営について、何かお気づきのことがあればご記入ください。

<感想>

- ・ 短時間のワークショップだったが、とても濃厚なディスカッションや情報交換ができた。
- ・ あまり形式にとらわれず、ディスカッションできたところが良かった。
- ・ グループの人数が5名と丁度良く、また大学が国・県・私学とミックスしてあったので学びにつながった。
- ・ 多様な大学構成でグループワークができたことがよかった。
- ・ 話し合いの時間が十分とれて話し合いがはずんで良かったと思う。
- ・ グループメンバーに支えられた。学びが今後活かされるよう、努めていきたいと思う。
- ・ WSの内容そのものも満足度が高いが、グループの先生方とつながりができたこともエネルギーを頂けたと感じる。地方の単科大学なので、今回このような他の地域の様々な大学の先生方と情報交換・意見交換ができる機会があれば自己啓発のエネルギーになる。
- ・ 2日間の研修であったが、ゆっくりと話す時間が確保されていた。課題は特になかったが、1日目の討議の結果を自然にふりかえりたい思いになり、結果的にそれが2日目の研修に役立った。企画の効果があったと思う。
- ・ 今回のワークシートが有効に活用できなかった（B、C）。
- ・ ワークシートに気づいたことをどんどん書き入れていくことで気づきが広がった。メモ形式での

使用がとてもよい。提出用であったら、アイデアの記入が広がらなかったと思う。

- ・ ファシリテータの親しみやすさがグループの輪を促進していった。
- ・ ファシリテータには、思いのままに話せる雰囲気づくりをして頂いた。
- ・ グループ人数も丁度良く、ファシリテータのコメントもとても役に立った。
- ・ ファシリテータがワークに入られたので、話し合いも活発になされたと思う。
- ・ ファシリテータが建設的で肯定的に関わって下さり、グループの先生方も様々な経験から多様な知識、視点をお持ちで、グループワークがよい雰囲気が進みとても勉強になった。
- ・ ファシリテータの介入にとっても助けられた。ディスカッションが深まり、気づきが促された。

<意見、気づいたこと等>

- ・ 持参する資料を検討するため、シート A だけでも事前に提示されると良かった。
- ・ ワークシート A を事前にある程度仕上げてから参加して、説明やディスカッションの時間をもう少し頂けると更に良かった。
- ・ 冒頭の説明が早すぎて、わかりにくかった。
- ・ 大学という組織としてということを考えていても、どこから一度自由になって個人としての視点で考えられることはワークショップのメリットだと思うが、全体討議がまた自大学というフォーマルにセッティングされるので、ちょっととまどった。ワークショップの目的は“とらえなおし”なのか“エネルギーを得る”ことなのか、つながってはいるのだがちょっと話しにくかったと思う。
- ・ 記録用紙が書きにくかったので改善した方がよいように思う。
- ・ 現状に至る振り返りをもう少し時間をとっても良いかもしれない。
- ・ 最後の発表はあらかじめ 1 G あたりの時間を伝えた方が、同じ時間で発表できるのではないか。
- ・ 休憩時間がほしかった。
- ・ 1 F ホールの清掃 (ほこりがおちている)、トイレの石けんの補充等 (2 日間ハンドソープなし) 細かい点も配慮されていればよりよいと思った。

10. 次年度の看護学教育ワークショップへのご要望やご意見をご記入下さい。

- ・ 多様な大学運営の中で、日本の看護系大学のあり方、教員 FD のあり方などたくさんあると思うが、参加メンバーの動機によると思う。
- ・ 問題意識をある程度しぼって、喫緊の課題であるカリキュラム評価や、自己点検・自己評価システムの効果的運営のあり方等で集中的な討議をしてもよいのではないかと思う。
- ・ ファシリテータのファシリテーションスキルの研修があるとよいのかなと思いました。
- ・ 臨床の指導者も含めた看護教育のスキルアップ
- ・ 若手を入れた CQI モデルの検討
- ・ 職位によりバージョンを変えたかたちでワークショップがなされるとよいのでは。
- ・ 各大学 2 名の参加を OK にしてほしい (1 名は今後大学を担う先生)。
- ・ 職位を広くして頂きたい。職位が講師以下の人も参加しやすいようにしてほしい。推進する役割がある人とそうでない人のグループを分けてもよいか。
- ・ 受講生の条件を下げてよいのではないか。

- ・ グループワークが大変良かったので、続けていってほしい。
- ・ 今日のスケジュール、プログラム内容について大きな負担はなかったのよかったです。最後の発表が口頭のみで（昨年度のようにパワポ作成がなかった点）よかったです。グループワークが充実できたと思う。
- ・ グループでの資料作成などのデューティーがなかったので、負担感が少なくて良かった。
- ・ 学内でこのような話し合いをしたい場合、先生方に依頼しないといけないのか。
- ・ 午前中の講演会場は暗くて資料が見えづらかった。最今の学会等ではパワーポイントの背景を「白」にして映写し、会場を明るくしているので検討してほしい。
- ・ 事前に資料があれば良かった。
- ・ 交流会について、あいさつ以外は何もなかったが、すべて自力で交流する形であったことが少し残念だった。せつかく参加するので、知らないグループの人と話しをするきっかけづくりがあると良かった。

11. 看護学教育研究共同利用拠点としての当センターに今後、期待することをご記入ください。

- ・ 図1について教授学習課程の中で、教員の個々の理想が関与すると感じた。教員の協力、交流が有意義だった。
- ・ このような研修は大変意義があると思う。今後FDへの講師依頼についても考えていきたい。
- ・ 悩みが生じた時、すぐに相談にのってもらえることがわかった。上手に利用させていただきなから、自大学をよりよい大学にしていきたい。
- ・ FD活動として出張でのCQIについての講演とGWファシリテートをお願いしたい。
- ・ 大学ごとのFDへの協力。
- ・ 今後の活動やその報告内容を広めて行ってもらいたい。
- ・ 教育研究への支援。
- ・ 看護教育の指導的立場を担ってほしい。
- ・ 国内に限らない世界の看護教育から知見を得て、その情報発信をお願いしたい。
- ・ “共同利用”について、個人的な共同利用、大学などの機関の共同利用もあり、学部レベルが主と思うが、困っているのは大学院教育ではないかと思う。高度実践教育、研究者養成教育、管理者養成教育など様々な期待があり、注ぎこむエフォートも大きいので、これらに対する何かがあればよいと思う。大学が増え、教員も不足して、人口は減っているのにどうなるのかと思っていたが、今回のワークショップを終えて、大学が多くあってもよいのではと思った。

15. おわりに

総括と CQI 事業への展望

千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター長

吉本 照子

1. 全国の看護系大学 276 校のうち、約 1/3 の 89 大学 101 名（講演と報告の部のみの参加者含む）が参加し、看護学教育行政の動向と看護系大学への社会からの役割期待、CQI モデル Ver. 1、CQI における外部指針の活用、さらに CQI の変革の事例について共有した。

続いて、全国の看護系大学の約 20%、56 大学 57 名が個人・グループワークに参加し、各参加者が多忙な日常から離れて、状況の捉えなおしや方略のアイデア創出のために相互支援を行い、自大学の CQI の方略を検討した。参加者の職位は教授 29 名、准教授・講師 28 名であり、次世代を含めて、各大学の CQI の推進に関する連携の機会の一つとなった。

2. 各講演の有用性について、講演と報告の部のみの参加者、全日程参加者ともに、90%以上が「CQI モデル試案」、文部科学省「看護学教育モデル・コア・カリキュラムの策定と活用」を「非常に役立つ」あるいは「役立つ」と回答した。自由回答では、CQI モデル Ver. 1 あるいは記録用紙の有用性とその理由について、自大学および他大学の状況の理解に有用、FD としてなすべきことへの気づき等が記述された。これらの結果から、看護学教育行政の動向のもとで、CQI モデル Ver. 1 はその内容が理解され、全国の看護系大学において活用の可能性があると判断できる。

一方、主に講演と報告の部のみの参加者から、より多くの実践例への要望があり、CQI モデルの活用推進のために、今後、CQI モデル Ver. 1 の精練と効果の検証について継続発信する必要がある。

〈CQI モデル Ver. 1 あるいは記録用紙の有用性〉

- ・ *図 1 を使いながら自大学の説明をすると普段意識していないことも考えるきっかけとなるため、自大学の見方を広げることができた。*
- ・ *ワークシートに気づいたことをどんどん書き入れていくことで気づきが広がった。*
- ・ *グループワークでシート A と図 1 を使うことで原因の関連性が明確になった。発表し他のメンバーから意見をもらうことで自大学の良さに気づき、解決方法のヒントとなった。*
- ・ *時間をかけてあらためてストーリーを組み立てたことで、まず自分（個人）ができること（取り組むことが）がみえた気がする。*

3. 全日程参加者は他大学との意見交換により、自大学をより客観視し、強み・弱み、あるいは課題に気づき、自らの立場でできることのヒントを得ていた。また、多様な看護系大学の共通の課題に気づいていた。これらの結果から、本ワークショップは、参加大学の連携の必要性和有用性の認識を促す機会となったと判断できる。

〈自大学の課題解決の手がかりの獲得〉

- ・ 他大学の現状を知る中で、自大学の在り方を見直す機会となり、活発な意見交換から自大学でも実践的に取り入れることができる方策に示唆を得られた。自大学の問題について解決のヒントをいただけたことも大きな収穫だった。
- ・ 「自学のとらえなおし」というよう、個人（自ら）の教育プロセスの見直しにつながった。“エネルギーを得る”というより解決プロセスや解決策を具体的に得ることができた。

〈他大学との共通の課題への気づき〉

- ・ 様々な大学の実情も理解できた。それぞれの状況の中でそれぞれが模索しながら努力していると思った。
- ・ 程度に差はあるものの、共通する課題、悩みや困り事があることを改めて実感した。
- ・ 国立・公立・私立大学で捉える課題についてその特徴の違いなどよく分かった。それに対する対策については、共通する事も多くあるように感じた。

4. 参加者は他大学のCQIの取組みを知り、あるいは意見交換を行うことにより、CQIへの多様なアイデアを得て意欲を高めていた。

〈他大学の状況の理解や教員との意見交換によるCQIに関するエネルギーの高まり〉

- ・ WSの内容そのものも満足度が高いが、グループの先生方とつながりができたこともエネルギーを頂けたと感じる。地方の単科大学なので、今回このような他の地域の様々な大学の先生方と情報交換・意見交換ができる機会があれば自己啓発のエネルギーになる。
- ・ エネルギーが本当に得られるのかどうか、半信半疑だったが、語ること、助言をもらうことの相互作用の中で、小から大まで複数のアイデアが浮かんできた。あとは行動にうつすのみだと思う。
- ・ 熊本保健科学大学の先生方のご発表にとっても力づけられた。（講演と報告の部のみの参加者）

2019年度は、CQI事業の最終年度として、CQIモデルの活用の効果を検証し、ワークショップ等で活用を推進する。

16. 実施体制

【講演と報告の部】

《講演者》

杉田 由加里 文部科学省高等教育局医学教育課 看護教育専門官

《報告者》

中村 京子	熊本保健科学大学保健科学部看護学科	教授
荒尾 博美	熊本保健科学大学保健科学部看護学科	准教授
和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	教授
黒田 久美子	千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター	准教授

【グループワーク】

《ファシリテータ》

1G:	吉本 照子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
2G:	野地 有子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
3G:	諏訪 さゆり	千葉大学大学院看護学研究科	教授
4G:	谷本 真理子	東京医療保健大学医療保健学部看護学科	教授
5G:	吉田 澄恵	東京医療保健大学千葉看護学部看護学科	教授
6G:	銭 淑君	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
7G:	田中 裕二	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
8G:	飯野 理恵	千葉大学大学院看護学研究科	講師
9G:	和住 淑子	千葉大学大学院看護学研究科	教授
	湯本 晶代	千葉大学大学院看護学研究科	助教
10G:	黒田 久美子	千葉大学大学院看護学研究科	准教授
	稲垣 朱美	千葉大学大学院看護学研究科	特任助教
11G:	斉藤 しのぶ	千葉大学大学院看護学研究科	准教授

《千葉大学運営組織》

大学院看護学研究科長 中村 伸枝 教授

センター教員会議および実行委員会

◎	吉本 照子	教授
○	野地 有子	教授
	手島 恵	教授
	和住 淑子	教授
	黒田 久美子	准教授
	銭 淑君	准教授
	田中 裕二	准教授
	佐藤 奈保	准教授
	飯野 理恵	講師
	湯本 晶代	助教
	稲垣 朱美	特任助教
(◎)	センター長・企画責任者	(○)実行委員長

平成30年度看護学教育ワークショップ 報告書

発行 2019年 2月

編集 千葉大学大学院看護学研究科附属看護実践研究指導センター

野地 有子、吉本 照子、和住 淑子、黒田 久美子、錢 淑君、稲垣 朱美

発行所 〒260-8672 千葉市中央区亥鼻1-8-1

千葉大学大学院看護学研究科

